

2010年度 リサーチペーパー

日本の若手トップアスリートにおける
両親の教育方針に関する一考察

Case Study Concerning the Parents'
Educational Concepts
in Japanese Young Top Athletes

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

学籍番号：5010A317-2

氏 名：杉山 芙沙子

Fusako Sugiyama

研究指導教員：平田 竹男 教授

目次

第1章 序論	4
第1節 背景	4
第2節 先行研究	6
第3節 目的	8
第2章 研究方法	9
第1節 現ジュニア選手からの相談事例	9
第2節 トップアスリートの親への調査	9
第1項 宮里藍	9
第2項 錦織圭	9
第3項 石川遼	9
第3章 現ジュニア選手の事例研究	11
第1節 ジュニア選手Aの事例	11
第2節 ジュニア選手Bの事例	12
第4章 トップアスリートの親への結果	13
第1節 宮里藍	13
第2節 錦織圭	18
第3節 石川遼	22
第5章 考察	25
第1節 インタビュー調査及びアンケート調査からの知見	25
第2節 幼児期のスポーツ教育に関する一考察	30
第6章 結論	33
謝辞	34
参考文献	35
付録	36
宮里豊子（母）インタビュー記録	36
錦織清志（父）、錦織恵理（母）インタビュー記録	55
石川由紀子（母）インタビュー記録	59

図表目次

表 5 1	遊びの習慣	25
表 5 2	競技経験	26
表 5 3	競技に関する親と子どもの認識	27
表 5 4	専門競技以外のスポーツ実施	28
表 5 5	スポーツ以外の習い事	29

第1章 序論

第1節 背景

筆者はプロテニスプレーヤー杉山愛のコーチ、ディレクター、そして母として関わった経験を持つ。この3つの役割を兼業することは日本では珍しいかも知れないが、世界で活躍するテニスプレーヤーの中には、こうした関係を持つ親子も珍しくない。例えば、アメリカのビーナス・ウィリアムズ、セリーナ・ウィリアムズ姉妹、ロシアのエレナ・デメンティエバ、デンマークのキャロライン・ボスニアッキ、そしてポーランドのアグニエシュカ・ラドワンスカなどはいずれも世界ランキングトップ10以内を経験したトップテニスプレーヤーであり、選手とコーチの関係にしても、親子の関係にしても、互いを尊敬し合う非常に良好な関係であると言えることができるだろう。

しかし一方で、世界で活躍する外国人選手の中にも、親やコーチから練習を強要されて本来のポテンシャルを十分に発揮できずに引退していった選手もいる。

スイスのマルチナ・ヒンギスは、「このままママがコーチを続けていけば、私たちの親子関係まで上手くいかなくなるので、ママがコーチを辞めることにしました」というコメントを発表し、引退と復帰を繰り返した選手である。

オーストラリアのエレナ・ドキッチも同様に引退と復帰を繰り返し、さらに、常に父親から虐待に近い言動をされ、お金を稼ぐことを強要され、また国籍を変えさせられた選手である。現在も現役選手としてプレーしているものの、一時は世界ランキング4位まで上り詰めた選手とは思えないほど、プレーに精彩を欠いていることは事実だ。

また、アメリカのジェニファー・カプリアティも引退と復帰を繰り返し、バーンアウト症候群を発症してから早い引退を余儀なくされている。

こうした問題は、選手達を救うため国際組織のWTA (Women tennis association) が次々とルールを改正するほど世界のテニス界では問題視されている。例えば、13歳以下はツアーでプレーできないことや18歳以下の選手は各年齢によって参加できるトーナメントの数が限られることなど、ツアーを回り始める年齢に制限を設けた。また特筆すべきことは、選手のロッカールームに母親はもちろん、コーチやトレーナーも入ることが許されなくなったことである。新人選手には「ルーキーアワー」と呼ばれる新人研修を受けることを義務化し、メディアに対する対処の仕方、親やコーチへの接し方が教育されるようになった。さらに、先輩選手がメンターとして割り当てられ、ツアーのルールなどを指導してくれたり、親やコーチへの不満も先輩選手が相談に乗ってくれたりするため、万が一、虐待を受けていた場合にも多いに役に立つシステムが作りだされている。

一方、杉山愛は2009年10月に17年間の現役生活に終止符を打つまで、「テニスの練習も試合も楽しく、そして自分の試合を観てくれる人に元気や勇気を与えることができれば最高である」をモットーにテニス人生を歩んできた。その間には、調子が良い時期もあれば悪い時期もあり、2000年には、本人から「テニスを楽しくないし、もうラケットを握ることはできない、辞めたい。」という言葉が出るほどのスランプに陥ったこともあったが、2003年には念願であった世界ランキングトップ10入りを果たすことができた。こうした成功を収めることができたのも、彼女が「テニスは“自分探し&自分磨き”のツールである」と捉え、自ら進化&成長し続けることに拘ってきたためであろう。

杉山愛の現役引退後、筆者はもう一度トップテニスプレーヤーを育てたいとの思いからジュニア育成現場に戻った。しかし、筆者はそこで数組の親子から相談を受けて衝撃を受けた。ジュニア本人はテニスが好きなのはなにも、コーチが厳しく指導し過ぎるためにコートに立つことができなくなり、食欲がなくなり体重が落ちるなどの健康面への影響も出ていたというものであった。具体的にこの厳しい指導とは、言葉による罵倒、長時間の練習など選手を痛めつけることに他ならないものだった。この時、「杉山愛もジュニア期にこのような厳しいトレーニングを積んできたのか」、また「こうしたトレーニングを積まなければ世界で活躍できる選手になれないのか」という質問を受けた。

この質問を受けて筆者は、相談者が疑問を持ったように、杉山愛のようなトップアスリートは幼少期から過酷なトレーニングを積み、テニスのみを集中して練習し、またテニスを始めた理由も当初からプロテニスプレーヤーになることを目指していたためだろうと、世間一般には認識されているのではないかという危惧を抱いた。

しかし、現実には決してそうではない。幼少期は、テニスをしながらも沢山遊び、テニス以外のスポーツやスポーツ以外の習い事を行っていた。テニス以外にもスイミング、クラシックバレエ、フィギュアスケート、体操をしており、特にスイミングは生後 10 ヶ月時から実施していた。また、スポーツ以外にも週 1 回ピアノと絵画を習っていた。こうしたテニス以外のスポーツやスポーツ以外の習い事は、親である筆者が彼女に勧めたものであるが、何よりも子どもの意志を尊重して行ったものである。当時のことを振り返れば、こうした他のスポーツや習い事をした経験は有意義であったと今も考えている。

テニスを始めたきっかけは、プロテニスプレーヤーになることではなく、テニスを通じて親子の会話が増え、家族のコミュニケーションが円滑になることであった。こうした理由がテニスを始めたきっかけであったため、世界で活躍することや世界ランキング 1 位など想像もしなかった。

その後、7 歳でテニスに専念した後は、毎回 3 時間の練習を週 6 日間やり、試合初出場から約 1 年後には初優勝を果たしている。筆者は非常に近くで杉山愛と接していたが、テニスに関して口うるさく言った記憶は全くない。常に彼女の意思を尊重にし、叱った経験もごくわずかだ。筆者はコーチ、ディレクター、そして母として杉山愛に一人の人間として接し、「テニスは楽しく、すること全てを楽しむ」ことや「自主性を重んじ、強要はしない」ことを教えてきたつもりである。

一方、筆者の周りでは、子どもをスポーツ選手に育てたいがために、病気以外では休みを取らずに過剰な練習時間を強いている親や、練習場に来て成績が芳しくない子どもを殴る親、また練習から帰った子どもに対して深夜まで説教をする親などを数多く見聞きしていることも確かである。

こうした状況の中、現在スポーツ選手育成現場では、選手とコーチ、選手と親の関係性について少なからず問題があるのではないかという認識を持ち、これらの関係性に非常に違和感を覚えている。

第2節 先行研究

スポーツ選手の幼児期における教育に焦点を当てた研究は、海外でも数多く行なわれている。特に、若年アスリートのオーバートレーニングによる身体的・精神的な悪影響や、過度な競争状態にさらされることによる悪影響に関する研究が多くなされている。

Tofler ら（1996）は、幼児期におけるオーバートレーニングは、選手のパフォーマンス低下、免疫力の低下やうつ病を引き起こす可能性があり、また恒常的に疲労を蓄積しやすくなると述べ、このオーバートレーニングは、トレーニング量やトレーニング強度の急激な増加による過度なストレスによって引き起こされると述べている。

また、Brenner（2007）は幼児期や青年期に選手を過剰にプレーさせることは、彼らのケガを引き起こす大きな要因であると述べ、勝利にかける親のプレッシャーが、子どものオーバートレーニングを引き起こす一つの重要な要素であると指摘している。

さらに Brenner は、若年時のスポーツ参加の最大の目的は、長期的な健康や余暇活動の促進、またその後の人生において有効な健全な競争意識の育成であると述べている。

その中で、親は、トレーニングや他者との競争状態から、子どもがどれほど多くのプレッシャーを与えられているかを認識する必要があり、特に、子どもが有望な若年スポーツ選手の場合は、身体的・精神的に大きな影響を与える過度なトレーニングを特に避けなければいけないとしているが、実際には親やコーチはこうした認識を有していないことが多いと指摘している。また、楽しさを増進すること、スポーツの技術を習得し向上させること、そしてそれぞれの選手の成功に焦点を当てた教育が必要であるとしている。また、Brenner は医学的な見地から以下の9つのガイドラインを示している。

1. 身体的・心理的に回復するため、週に1～2日は競技やトレーニングから離れる休息日を設けることを推奨する。
2. 1週間あたりのトレーニング時間、反復練習の回数などの増加は、最高でも10%に留めることをアドバイスする。（例）ある週に20マイル走ったら、次週に伸ばす走行距離は2マイル以内とする）
3. 年に2～3ヶ月は競技から離れることを推奨する。
4. スポーツを実施する際は、楽しみ、技術の向上、安全、そしてスポーツマンシップを心掛けることを強調する。
5. アスリートは1シーズンに1つのチームに所属することを推奨し、もし選抜チームなどに選ばれた場合は上記の項目の時間に組み込まれるべきである。
6. もし、アスリートが非特異性筋肉や関節に問題や疲労があると不満を言ったり、パフォーマンスにも問題があるとしたら、これはバーンアウトの可能性があると考える。また、これはモチベーションにも関係している。
7. 選手たちにオーバートレーニングやバーンアウト症候群などを教育する医学的な諮問委員会の設置を推進するべきである。
8. 選手、親、コーチに対して、栄養、安全性、パフォーマンスの向上や健康促進のための教育機会を提供することを促進すること。
9. 短期間に多くの試合に出場する選手を持つ親に対して、特に警告を発する必要がある。

日本においても、佐々木（2009）は子どもの習い事ブームを背景として、子どもの習い事に対する父親の関わりが、子どもの習い事に与える影響を分析した。その結果、佐々木は、子どもの習い事に関連した父親の行動が多くなると、子どもの習い事に対す

る意識も高まることを明らかにした。また武田ら（2003）は、親や指導者などの大人が、子どもに対して過剰な期待を寄せ、子どもを管理していることに対して疑問を呈している。

さらに、永井（2004）はその著書において、「少年期にはどのようなスポーツ環境が必要か、などという根源的なことを見つめる姿勢はどこへやら」と述べ、「少年期にスポーツをどのように与えるべきか、という大切な命題をすっかり忘れてしまっている監督・コーチ、そして親が多いのです。その結果、私から見れば、スポーツに深く関わるのが成長発達に好ましい影響を与えるどころか、かえってスポーツをすることが少年の人格を歪めてしまうのではと心配される現象も増えています。」と、誤ったスポーツ指導における危険性を指摘している。これは、指導者や親の子どもへの間違っただけの接し方が、子どもの人格形成において悪影響を及ぼすことへの警鐘を鳴らすものである。

また、永井（2004）は特に、子どもをスポーツスターにしようと必死になっている親を「ピッチペアレンツ」と名づけ、子どものスポーツ活動に入り込み、ときに子どものふがいない動きに失望して「どうしてできないんだ」などと怒鳴る親がいることなどを問題視している。そして、こうした教育について、「子供にとって、こんなに負担になることはありません。（中略）やがて怒られていることが嫌で、スポーツへの興味を失ってしまうかもしれません。」と述べ、指導者や親の子どもに対する過剰な期待と練習が、子どもにとって大きな負担になるだろうと述べている。

このように Tofler や Brenner による一般的なオーバートレーニングの危険性や、永井による親の過剰なスポーツ教育に警鐘を鳴らす研究はあるものの、トップアスリートの具体的なケースに基づき、親子のあり方に言及した研究はない。さらに、トップアスリートの親自身が研究したものもない。

第3節 目的

上記の危機意識から本稿の目的は、トップアスリートになるためには、親やコーチによる若年スポーツ選手への過剰なスポーツ教育が必要であるという認識に対する一考察を試みることである。

第2章 研究手法

第1節 現ジュニア選手からの相談事例

上記の目的を達するため、第一に、筆者が育成現場で実際に受けた2名の相談内容の事例研究を行う。

第2節 トップアスリートの親への調査

第二に、現在国内や海外で活躍しているトップアスリートの親に対し、その子ども時代の教育環境に関するインタビュー調査及びアンケート調査を行う。

本稿では、宮里藍、錦織圭、石川遼の3名の親に対して調査を行う。

第1項 宮里藍

宮里藍は、2003年に史上初の高校生プロゴルファーとしてデビューし、2005年の日本女子オープンゴルフ選手権競技において公式戦初優勝を達成している。さらにこの優勝によって史上最年少(20歳3か月)でツアー通算10勝を果たし、並びに同大会史上最年少優勝も獲得した。2006年度からは活動拠点をロサンゼルスに移してアメリカツアーに本格参戦し、2010年6月12日付けの世界ランキングでは日本人初となる第1位になるなど、日本を代表する女子プロゴルファーである。

インタビュー調査及びアンケート調査の概要は以下の通りである。

対象：宮里豊子(母)

日時：2010年6月9日

場所：沖縄県

第2項 錦織圭

錦織圭は、2007年に17歳でプロに転向した後、翌年のデルレイビーチ国際選手権でツアー初優勝し、同年8月に行われた全米オープンテニスでは、日本人男子シングルスとして71年ぶりにベスト16に進出するなど、日本を代表するトップアスリートの一人であると言える。

インタビュー調査及びアンケート調査の概要は以下の通りである。

対象：錦織清志(父)、錦織絵里(母)

日時：2010年6月30日

場所：ウィンブルドン

第3項 石川遼

石川遼は、2008年1月10日に16歳3ヵ月24日の史上最年少のJGTO ツアープロとなった日本のゴルファーである。アマチュア時代には、2007年のマンシングウェアオープン KSB カップで、日本のプロゴルフ大会における史上最年少優勝を達成している。また、2009年には、年間獲得賞金額が1億8352万4051円で賞金王となって最年少賞金王記録を更新し、同年の日本ゴルフツアー機構（JGTO）主催の「2009年度ジャパンゴルフツアー表彰式」では、史上初の9冠（賞金王、最優秀選手賞、Unisysポイントランキング賞、平均ストローク賞、平均パット賞、バーディ率賞、ゴルフ記者賞、MIP賞、特別賞）に輝くなど、日本を代表するプロゴルファーである。

インタビュー調査及びアンケート調査の概要は以下の通りである。

対象：石川由起子（母）

日時：2010年11月1日

場所：横浜カントリークラブ

第3章 現ジュニア選手の事例研究

第1節 ジュニア選手Aの事例

2008年12月末、筆者のテニスアカデミー生徒の紹介で来社。女性。現在高校2年生（2010年12月時点）
身長164cm、体重46kg、細身の体型。

ジュニア選手Aからの相談内容は以下の通りである。

2006年4月、彼女が中学一年生のとき、家族が住む群馬県より父親の単身赴任をきっかけに、母親と一緒に山梨県に移住し、テニスアカデミーと学校がリンクしたスパルタ教育で有名な環境へと生活を移した。

移動後6ヶ月を過ぎた頃より、毎日のテニスが何故か憂鬱になり出した。練習は学校が終わった16時から22時まで行き、怪我や病気をしない限り、休日は無い。週末には必ず試合に参加する。練習の間、コーチからは褒める言葉は一つもなく、「何やってるんだ」、「それだから上手くならないんだ」など、次から次へと罵声が飛んでいた。

2007年7月頃より食欲が無くなる。体重は当該テニスアカデミー移動前と比べて6kg程減少する。

それでも毎日の練習には参加していたが、惰性での参加であった。テニスの戦績も、それまでは全国レベルで戦っていたが、このアカデミーに移動して以来、一度も全国レベルに出場しなくなった。

テニスも上手くならず、コーチと話をすることも無くなった彼女は、2008年4月、近所の病院を訪れたところ心療内科の診察を薦められる。そこでは、強度の疲労と何かに怯える精神的苦痛から、うつ病と診断された。

この時、筆者は最初の電話相談を受け、「まずはゆっくり休んで、テニスも休んだ方がいい」と忠告すると、今度は「テニスを休むことが怖い」と言い出した。これは、それまで5歳からテニスを休みなく行なっており、休むこと自体が怖いと感じているためだった。

それでは精神的にも良くないと感じた筆者は、週末だけ弊社に練習に来るように薦めた。すると、このジュニア選手Aは弊社に練習に来るたびに次第に明るくなり、食欲も出て、体重も回復していった。彼女の声も明るさを取り戻したと言えるだろう。

その後、筆者は彼女がかつて在籍していたテニスアカデミーの校長と、ジュニア選手Aがそのアカデミーを辞めることを承知してほしいという旨の交渉をした。また、彼女は当時中学3年生であり、そのテニスアカデミーとリンクした中高一貫校に通って高校受験の準備もしていなかったため、筆者は神奈川県のある高校教諭と相談し、ジュニア選手Aが移動して来ることができるようにし、無事に移住して弊社のテニスアカデミーで練習を開始した。

その後、ジュニア選手Aは夏の全国高等学校総合体育大会（インターハイ）でテニス・ダブルスの部優勝を果たした。この時、偶然、インターハイ会場で元テニスアカデミーのコーチと出会い、「うちで練習していたことが、やっと芽が出たな」と言う言葉をかけられていた。

第2節 ジュニア選手 B の事例

2009年10月、選手 B の両親が相談のため筆者のもとへ来社。女性。現在高校1年生（2010年12月時点）

ジュニア選手 B からの相談内容は以下の通りである。

ジュニア選手 B は元アカデミーで優秀な選手のため優遇を受け、そのアカデミーの校長から直々にレッスンを受けていた。しかし、校長からのアドバイスは理解し難いものがあり、質問すると「解るでしょ、そんなこと聞かないで」と言われ続けた。次第にその校長コーチと何も話せなくなり、またレッスンがつまらなくなって行きたくない程になった。そして、食欲が落ち、体重も落ちてきたので、このジュニア選手 B の親は、どうにか回復させたいとの思いから、筆者のもとに相談に来た。選手が直接会いに来ない理由は、もし弊社のアカデミーに相談に来たことが知れたら、大きな騒ぎになるというのを恐れたためであった。両親から相談を受けた筆者は、弊社ではなく、そこから1時間程離れた場所で選手に会い、現在の様子と彼女の心境などについて話を聞いた。

その内容としては、彼女は校長のレッスンがどうしても受けることができない精神状態に陥ったため、レギュラーのレッスンを受けることにしたが、元アカデミーでは「校長レッスンを断った人は、どうなろうがこちらの知るところではない」と他コーチらからも批判を受け、ついにレッスンに行けなくなったというものであった。

その面談後、彼女は弊社のアカデミーに移動を決意した。移動後は毎日の練習も明るく参加し、現在はプロテニスプレーヤーを目指して毎日練習に励んでいる。

第4章 トップアスリートの親への結果

第1節 宮里藍

本節では、女子プロゴルファーである宮里藍の母親（宮里豊子）に対するインタビュー調査及びアンケート調査の結果を示した。

- ・よく遊んでいたか？
- かなり遊んでいた。
- ・何時頃によく遊んでいたか？
- 8時半～17時
- ・毎日どれくらい遊んでいたか？
- 8時間半
- ・どこで遊んでいたか？
- 保育園
- ・誰と遊んでいたか？
- 保育園の友達
- ・どのくらいの人数で遊んでいたか？
- たくさん
- ・ゴルフを始めたのは何歳か？
- 「彼女は、4歳からですね。」
- ・「それはお兄ちゃん達がやっているの、私もという感じで？」
- 「そうなんです。最初は3歳からピアノを習い始めました。」
- ・ゴルフに専念するまで、誰とゴルフをしていたか？
- 「私もアマチュアで少しやっていたものですから、主人も含めて毎週末、家族一緒に1000円で打ち放題という練習場に行くわけです。小学校を卒業するまでくらいは一緒に行っていたんですが、だんだん足手まといになりまして。今は1年に1回クラブを握るか握らないかですね。週末になると男子のトーナメントがあるから応援に行ったり、藍が帰ってきたら国内の選手と旅行に行ったり、それでいっぱい、とても自分のゴルフというのは...。」
- ・ゴルフに専念するまで、ゴルフを週にどのくらい行っていたか？また、それは何曜日か？
- 1日。日曜日。
- ・ゴルフに専念するまで、ゴルフを1日どのくらい行っていたか？
- 練習場で2時間。

・初めて試合に出場したのはいつか？

- 8歳（小学2年生）

・初めて優勝したのはいつか？

- 11歳（小学5年生）

・ゴルフに専念すると決めたのはいつか？

- 「同じようにピアノをやったり、書道教室に行ったり、あれこれやったんですけれども、最終的には5年生の後半にはゴルフに行きました。小学校6年の時には世界ジュニアに行っていました。」

・ゴルフに専念してから、週にどれくらいゴルフを行っていたか？

- 「週末になると主人が練習場に連れて行って、1週間に1回練習していました。小学校の間はそういう感じでやってきました。しかし、中学校になるとそうはいかなくなり、やっぱりちゃんとしたトレーニングだったり、練習だったりなので。その頃から高校進学のために塾にも通わなくてはいけなかったのです。」

・ゴルフに専念してから、1日にどれくらい行っていたか？

- 「1時間でも練習場に行きたいと、11時の閉店まで1時間はボールを打って、それから帰ってきていました。」

・専門種目以外のスポーツも行っていたか？また、それはどのようなスポーツか？

- 「そうですね。野球とバスケットボールをやっていました。最初は野球もあったんですが、人数が9人揃わないんですよ。小学校までは少年野球があって、中学校に入ったらもうバスケットボールしかなかったんですよ。男女とも吹奏楽部とバスケットボールだけです。本人たちはバスケットボールを毎週楽しくやっていました。8月は陸上のシーズンで、みんな陸上競技をやるんです短距離に出たり、リレーに出たり。藍なんかもそういう形200mのリレーなどでよくやっていましたね。とにかく本当に人数が少ないので、すべてやらないと学校自体でそういうことにチャンスがなかったんですよ。」

・それはいつごろから始めたか？

- 小学4年生

・いつまで行っていたか？

- 小学6年生

・そのスポーツ実績はあるか？

- 地区大会3位

・運動以外の習い事も行っていたか？（音楽や芸術など）また、それは何か？

- 「当時は『大きくなったらピアノの先生になる』って言っていましたね。お兄ちゃん達はゴルフをやっていましたが、藍は女の子なので、ピアノを弾きながら、音楽の聞こえてくる、なごやかな家庭が築けたらというくらいで。女の子はお嫁に行ってもピアノの先生になれるので。だから『ピアノを一生懸命にやって、そっちの方に進んだら』、なんて言っていましたね。ピアノは小学校5年生までやっていたんですよ。」

・習い事で表彰されたことがあるか？

- いいえ

・習い事はどれくらい続けていたか？

- 6年間

・習い事（スポーツも含む）は週何回行っていたか？

- 1回

・子どもに習い事を積極的にさせるべきか？

- どちらとも言えない

・子どもの習い事について、子どもの意志が大事か？

- 少しそう思う。

・子どもに習い事をさせる上で、親の意志と子どもの意志はどちらが大事か？

- 子どもの意志

・なぜそう思うか？

- 無理強いはしない。本人の気持ちを大事にする。

・習い事はどうして始めたのか？

- 近所の友だちの影響

・本人は、習い事は好きだったか？

- かなりそう思う。

・習い事をしていて良かったと思うか？

- かなりそう思う。

・小さい頃から習い事をするべきだと思うか？

- 少しそう思う。

・子どもにゴルフをやらせた目的は何か？また子どもが成功すると思っていたか？

ー「最初からゴルフをさせようとしていたわけではありませんでした。主人が教育委員会で勤めており、非行があったり、親子の会話がないなどさまざまな家庭環境を見ていて、なにかを通じで教育できるものがあつたらいいなと思っていたんですね。それがたまたまゴルフだったんです。」(中略)「本当にゴルフを通じて、いまは共通の話題ができて、いつでもそれに対して自分の思っていることを「自分はこうしたい」と対等に話し合える、いい形で会話が出来ているんですね。」

・子どもに才能があると思ったのはいつか？

- 中学2年生

・子どものゴルフの関わり方について、口うるさく言わなかった？

- ややそう思う

・子どもが決めたことに対して全力でサポートしていたか？

- 「やらなきゃいけないっていう気持ちがあるんですね。疲れたとか言ってもらえないんですよ。仕事が17時15分に終わって、急いで帰らなくちゃと。おばあちゃんもちょうど92歳まで元気で、ずっとクリスチャンで穏やかな人だったので、『ただいま』という『おかえり』という言葉が返ってくると子どもたちは安心するんですよ。小学校までは共働きでみんな鍵っこだったので、職員住宅で、おやつを準備しているから知らない人が来ても開けちゃだめよっという感じで。高学年になると、帰る時間も同じくらいになるのですが、低学年の頃は心配で。お昼時間に急いで帰って、お弁当を準備していました。」

(中略)

「主人もお互い公務員だったのですが、聖志が中学3年生の時に、藍が6歳の時に、市町村の教育委員会を辞めて、村長選挙に立候補したんです。みんなからも出てくれといわれて。結局接戦で負けちゃったんですが、1000人ちょっとしかいない村なので、選挙の結果というのがすごく大きいんですね。だから結局、退職したけれども職に就こうとしたら、仕事が無くて、本当に苦しい思いで、収入が得られない状態になったんです。そのときに、主人はもともと指導するのが好きな人だったので、資格を取って、ティーチングプロを目指したんですが、それまでの4年のブランクの間は、私1人の給料でなんとかやっていかなきゃいけませんでした。ボーナスは手をつけずにそのままおいて、7月や8月にある子ども達のジュニアの大会の遠征費にあてていました。」

(中略)

「今までが共働きでうちを留守にする、3年したら転勤があるので残業があったり、一旦かえって夕飯を作って、また仕事に行ったり。結構そういうこともあったんですよ。お年よりも抱えているから、もう少し融通が…。こう言ってはあれなんですけれども、会計事務でも6時には帰れるようにと上司に相談して、変えてもらったりとか。そういうこともありました。」

(中略)

「本当にもう、がむしゃらというか、やらなければ生活ができないし。あの子達も試合にも出さなきゃいけないし。そのときは何とかしなくちゃという思いですよ。だから、苦しいとかということもなかったですね。いま考えてみたらよくがんばったなって思いますけどね。」

・子どもは他の子どもと比べて負けず嫌いだったか？

- 大変そう思う。

・子どもは外の子に比べて集中力があったか？

- ややそう思う。

その点に関して、エピソードがあれば教えてください。

- 「練習も藍だけは全然手を抜かないんです。すべてに対して、勉強もするし、練習も手を抜かない。『勇作兄ちゃんみたいになりたいって』。でも勇作はどっちかというところ、『明日もあるから大丈夫』という、温厚な部分があり、だから逆に藍がすごく頑張るので可愛がるんですよ。そして藍もそこからいろんなものを吸収していきましたね。」

・子どもは他のこと比べてリーダーシップがあったか？

- 「そうなんです。小さい時から、沖縄の方言で『しきら一』と呼ばれてまして、要す

るに「しきり屋さん」という意味なのですが、いつもクラスやチームのまとめ役をやっていて、よく『しきらー』と呼ばれていましたね。」

・その点に関して、エピソードがあれば教えてください。

- 「保育園の年長の頃、年下の子の面倒をよく観ていました。2人の知恵遅れの子がいて、いつも2人の手をつないで行動していましたね。いじわるする子がいれば、注意したり、グループのまとめ役をよくやったりしていました。

第2節 錦織圭

本節では、プロテニスプレーヤーである錦織圭の親に対するインタビュー調査及びアンケート調査の結果を示した。

・よく遊んでいたか？

- かなり遊んでいた。

・何時頃によく遊んでいたか？

- 8～18 時頃、16 時～18 時頃。

・毎日どれくらい遊んでいたか？

- 3 時間

・どこで遊んでいたか？

- 公園や家、幼稚園

・誰と遊んでいたか？

- 親、姉、近所の友だち

・どのくらいの人数で遊んでいたか？

- 2～5 人

・テニスを始めたのは何歳か？

- 清志「ラケットを振っていたのは3歳ですが、テニスらしくやり出したのは5歳です。」

・誰の影響で始めたか？

- 両親

・テニスに専念するまで、誰とテニスをしていたか？

- 父親、姉、コーチ

・テニスに専念するまで、テニスを週にどのくらい行っていたか？また、それは何曜日か？

- 4～5 日。火曜日、木曜日、(金曜日)、土曜日、日曜日。

・テニスに専念するまで、テニスを1日どのくらい行っていたか？

- 2 時間。

・初めて試合に出場したのはいつか？

- 清志「7歳ですが、そこそこ勝って、身体も小さかったので負けるんですが、それが悔しくて、親もですが、圭も泣いていました。このまま生半可にやっていたら勝てないし、苦しいだけなので、負けず嫌いな性格がだんだんテニスに集中していったのでしよう。」

初めて優勝したのはいつか？

- 7歳

・プロを意識したのはいつか？

- 清志「小学校2年生ですね。試合に出ていくと中国大会では負けなしでしたので、いよいよ才能があるのかな、と思いだした。その頃、全小で優勝することを6年生に設定したんです。」

・テニスに専念してから、週にどれくらいテニスを行っていたか？

- 5日

・テニスに専念してから、1日にどれくらい行っていたか？

- 2〜3時間程

・専門種目以外のスポーツも行っていたか？また、それはどのようなスポーツか？

- 清志「サッカーはやってました。」

・それはいつごろから始めたか？

- 3歳（スイミング）、5歳（サッカー）、7歳（野球）

・いつまで行っていたか？

- 清志「4年生までやってました。」

- 10歳（スイミング）、12歳（サッカー）、9歳（野球）

・運動以外の習い事も行っていたか？（音楽や芸術など）また、それは何か？

- はい。音楽教室

・習い事で表彰されたことがあるか？

- いいえ。

・習い事はどれくらい続けていたか？

- 3年程

・習い事（スポーツも含む）は週何回行っていたか？

- 3回。音楽教室は週1回。

・子どもに習い事を積極的にさせるべきか？

- かなりそう思う。

・子どもの習い事について、子どもの意志が大事か？

- かなりそう思う。

・子どもに習い事をさせる上で、親の意志と子どもの意志はどちらが大事か？

- 子どもの意志

・なぜそう思うか？

- 子どもの意志、性格、適性を見極め、考えた上でさせたほうが良いと思う。

・習い事はどうして始めたのか？

- 親、兄弟の影響

・本人は、習い事は好きだったか？

- 少しそう思う。

・習い事をしていて良かったと思うか？

- かなりそう思う。

・小さい頃から習い事をするべきだと思うか？

- かなりそう思う。

・子どもにテニスをやらせた目的は何か？

- 清志「テニスは『家族のきずな』みたいなものでした。当時を思うと、その頃が本当に子どもにとっても親にとっても凄くたのしかった。」

(中略)

清志「『家族の絆』ですね。みんなで遊び気分でやるテニスは最高でした。」

・子どもが成功するとは思わなかった？

- 清志「いつまでもテニスで遊んでいました。で、僕が大学からやっていたのですが、そこからプロになるのは無理だけど、今からこんなに上手いんだったら、世界一になれるのかもな〜、と、一人で妄想していました。勿論、圭にそれを言ったことは一度もありませんが。この頃、圭に才能があるとは思わなかった。でも、思いは成就するとも思っていました。」

・子どもに才能があると思ったのはいつか？

- 清志「よく覚えていないですね。でも、その頃、バレーボールみたいなことや、遊びが入っていることをいろいろやっていて、それが、圭にとっても、お姉ちゃんにとっても、僕にとっても一番たのしかった。そういう遊びの中で育っていったし、今はそれがいきていると思います。ですから、高校中学から始めたら遅い と思います。そして、圭はいつも面白そうにやっていたし、真面目にやっていたことはなかったけど、やってほしいとも思っていなかったです。面白ければそれでいいと思います。」

・子どものテニスの関わり方について、口うるさく言わなかった？

- 清志「いや、負ける時も結構ありましたが、大きくなる時期が違うので、大丈夫かな、と思っていました。当時のコーチのことも信頼していたので、そしてそのコーチが才能を認めてくれていたので勇気づけられました。それに、『絶対にテニス』と思っていなかったのも、サッカーもずっとやっていて、サッカーにも友達がいたのですが、親が強制したのではなく、自分でテニスを選んでいきました。」

(中略)

清志「練習に行こうと親が言ったことはありません。」

・子どもが決めたことに対して全力でサポートしていたか？

- 大変そう思う。

・子どもは他の子どもと比べて負けず嫌いだったか？

- 大変そう思う。

・その点に関して、エピソードがあれば教えてください。

- 清志「テニスの中国地区大会に始めて出場した小学2年の貼る、第一シードの6年生の選手と対戦して敗北、その場でくやしくて大泣きました。」

(中略)

清志「サッカーをやっているけど、目の前に大会があると集中して練習していました。兎も角、負けず嫌いで、勝敗に拘る性格で、勝つまでやりました。」

(中略)

清志「トランプでもどんなゲームでもそうでした。」

(中略)

清志「圭は我慢ならずにはちゃぶ台をひっくり返していました。勝つまでやりましたし、勝って始めて圭は嬉しいんですね。それは、テニスの試合でもいつもそうです、今もそれは変わりませんね。」

・子どもは他の子に比べて集中力があつたか？

- ややそう思う。

・その点に関して、エピソードがあれば教えてください。

- テニス、サッカー、ゲーム等、好きなことには強い集中力を見せていた。

・子どもは他のこと比べてリーダーシップがあつたか？

- あまり思わない。

・その点に関して、エピソードがあれば教えてください。

- 先に立ってやる人がいるときは自分からは行かないが、やらざるを得ないときには仕方なくやるタイプ。(運動会のチームリーダー等)

第3節 石川遼

本節では、プロゴルファーである石川遼の親に対するインタビュー調査及びアンケート調査の結果を示した。

- ・よく遊んでいたか？
- かなり遊んでいた。
- ・何時頃によく遊んでいたか？
- 8～12時、13時～15時
- ・毎日どれくらい遊んでいたか？
- 4～5時間
- ・どこで遊んでいたか？
- 公園や家、幼稚園
- ・誰と遊んでいたか？
- 近所の友だち
- ・どのくらいの人数で遊んでいたか？
- 4～5人
- ・ゴルフを始めたのは何歳か？
- 3歳頃
- ・誰の影響で始めたか？
- 両親
- ・ゴルフに専念するまで、誰とゴルフをしていたか？
- 父親
- ・ゴルフに専念するまで、ゴルフを週にどのくらい行っていたか？また、それは何曜日か？
- 1～2日。土曜日と日曜日。
- ・ゴルフに専念するまで、ゴルフを1日どのくらい行っていたか？
- 1時間程。
- ・初めて試合に出場したのはいつか？
- 10歳
- ・初めて優勝したのはいつか？
- 11歳

- ・ゴルフに専念すると決めたのはいつか？
- 11歳
- ・ゴルフに専念してから、週にどれくらいゴルフを行っていたか？
- 6日か7日。
- ・ゴルフに専念してから、1日にどれくらい行っていたか？
- 2〜3時間。
- ・専門種目以外のスポーツも行っていたか？また、それはどのようなスポーツか？
- はい。スイミング、サッカー
- ・それはいつごろから始めたか？
- 6歳（スイミング）
- ・いつまで行っていたか？
- 小学6年生の最初。
- ・そのスポーツ実績はあるか？
- なし
- ・運動以外の習い事も行っていたか？（音楽や芸術など）
- いいえ。
- ・習い事で表彰されたことがあるか？
- いいえ。
- ・習い事はどれくらい続けていたか？
- 6年くらい
- ・習い事（スポーツも含む）は週何回行っていたか？
- 2回（スイミング）
- ・子どもに習い事を積極的にさせるべきか？
- どちらとも言えない。
- ・子どもの習い事について、子どもの意志が大事か？
- かなりそう思う。
- ・子どもに習い事をさせる上で、親の意志と子どもの意志はどちらが大事か？
- 子どもの意志
- ・なぜそう思うか？
- 好きで、楽しくなければ続かないから。
- ・習い事はどうして始めたのか？
- 体を丈夫にして欲しかったから。

・本人は、習い事は好きだったか？

- かなりそう思う。

・習い事をしていて良かったと思うか？

- かなりそう思う。

・小さい頃から習い事をするべきだと思うか？

- どちらとも言えない。

・子どもにゴルフをやらせた目的は何か？

- 家族の団らんのため。

・子どもが成功するとは思わなかった？

- ややそう思う。

・子どもに才能があると思ったのはいつか？

- 特にそう思わなかった。

・子どものゴルフの関わり方について、口うるさく言わなかった？

- ややそう思う。

・子どもが決めたことに対して全力でサポートしていたか？

- 大変そう思う。

・子どもは他の子どもと比べて負けず嫌いだったか？

- どちらでもない。

・その点に関して、エピソードがあれば教えてください。

- 小さい時、争うことはしなかった。一歩引いている感じだった？

・子どもは外の子に比べて集中力があつたか？

- どちらとも言えない

・その点に関して、エピソードがあれば教えてください。

- 車のプラモデルを作ろうとしたが、最後まで作れなかった。

・子どもは他のこと比べてリーダーシップがあつたか？

- ややそう思う。

・その点に関して、エピソードがあれば教えてください。

- 小学校 5、6 年生頃から、クラスを中心にいたように思う。音楽会や体育祭など、みんなを引っ張っていた。

第5章 考察

第1節 インタビュー調査及びアンケート調査からの知見

宮里藍、錦織圭、そして石川遼の親へのインタビュー結果、そして、親として接してきた杉山愛への経験を以下の表にまとめることができる。

表 5-1 遊びの習慣

	杉山愛	宮里藍	錦織圭	石川遼
よく遊んでいたか	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う
毎日どれくらい	9～16時	8～17時	8～18時	8～15時
どこで	家・公園・幼稚園	保育園	家・公園・幼稚園	家・公園・幼稚園
誰と	友達・親	友達	親・友達・姉	友達
何人で	2～5人	たくさん	2～5人	4～5人

表 5-1 より、4人のトップアスリートに共通して言えることは、寝ること、食べること以外は、ほとんどの時間を外遊びに費やし、一人で遊ぶことよりも、友達もしくは家族と遊ぶことが多いということである。その場所も選ばず、家、保育園・幼稚園及び公園であり、一人で家や部屋にこもることは少なかったという結果がインタビューから得られた。また、杉山は近くにある公園には雨が降らない限り、毎日出かける規則正しい毎日を送っていた。宮里藍は、平日保育園に通い、週末は兄たちとともにゴルフの練習について行くようになり、いつの間にか兄たちを追い越したというエピソードを持つ。石川遼は妹が生まれるまで一人っ子であったため、母親が敢えて公園に連れていき、近所の友だちとたくさん遊ぶ時間が取れた。(付録・インタビューより抜粋)

表 5-2 競技経験

	杉山愛	宮里藍	錦織圭	石川遼
競技専念前				
競技開始	3歳	4歳	5歳	3歳
練習頻度(/週)	4日	1日	4~5日	1~2日
練習時間	2時間	2時間	2時間	1時間
競技専念後				
競技専念	7歳	13歳	12歳	11歳
練習頻度(/週)	6日	5・1日	5日	6~7日
練習時間	3時間	2.5時間	2~3時間	2~3時間
試合初出場	7歳	8歳	7歳	10歳
試合初優勝	8歳	11歳	7歳	11歳

表 5-2 より、4 人とも専門競技を 3~5 歳という非常に早い時期から開始していることがわかる。この理由として、彼らが最初に専門競技（テニスまたはゴルフ）を一緒に始めたのが親もしくは兄弟であり、その競技用具が家にあるなど、身近にその競技と触れられる環境があったからであると言えるだろう。

また、現在日本では、テニスにおけるアカデミーシステムがしっかりしているため、テニスをしたいと思えば、週 4 回のレッスンを比較的手軽に受けることができる環境にある。そのため、他の習い事やスポーツと並行して行うことができるだろう。

ゴルフに関しては、小さい頃は練習場に行かなくても家の庭でできる場合が多いということもあるため、練習場へ行く回数で測った今回の練習頻度は、テニスより少ない数字となった。

また、競技に専念する以前の練習時間は、どのアスリートの親も 2 時間程度と回答している。この結果から、子どもが練習したり休んだりする中で、集中力が持続する時間は 2 時間程度が適切かも知れないという示唆を得た。専門競技に専念してからも練習回数は増えているが、一回の練習時間は 2~3 時間となり、若い世代の練習量としては適切と言える。

試合初出場は全員が比較的早く、初出場から時間をおくことなく、優勝を経験していることは特記すべき点である。

表 5-3 競技に関する親と子どもの認識

	杉山愛	宮里藍	錦織圭	石川遼
競技を行った目的	家族の 団らん	家族の 団らん	家族の 団らん	家族の 団らん
将来成功すると思っ たか	全く 思わない	あまり 思わない	全く 思わない	やや そう思う
才能があると感 じた時	10歳	14歳	8歳	思わない
親の口出し	全く口うるさ くない	やや 口うるさい	あまり口うる さくない	やや 口うるさい
親のサポート	大変 していた	大変 していた	大変 していた	大変 していた

表 5-3 から、競技を行った目的は全員が「家族の団欒」としており、これは非常に重要な結果であると筆者は考える。つまり、専門競技を小さい時からスタートしたにも関わらず、プロアスリートを意識して競技をさせていなことは大変興味深いことであり、重要なポイントである。また、親は子供たちに対して、プロになって将来成功するとは考えておらず、大きな期待を抱いていたわけではないと言える。

また、親は子どもに「才能がある」と感じた時は、それぞれある時期にやってくるが、筆者の場合はアスリート自身に才能を感じたというよりも、他人から言われて「そうかもしれない」と思っているうちに、「もしかしたら才能があるのかもしれない」という心情の変化があった。

また、このように自分の子どもに才能があると認識し始め、また、練習として専門競技を一緒に行っていくうちに、親が口煩く言ったかどうかについては、テニスとゴルフでは全く違う結果を得たことも興味深い。ここで興味深いことは、全員が「サポートを大変していた」と回答していることであり、また、インタビューをしていく中で「サポートをしてあげた」というイメージではなく、どの親からも無我夢中であった、というコメントを得ることができたことである。

表 5-4 専門競技以外のスポーツ実施

	杉山愛	宮里藍	錦織圭	石川遼
専門以外のスポーツ	スイミング、クラシックバレエ、フィギュアスケート、体操	ミニバスケットボール	スイミング、サッカー、野球	スイミング、サッカー
始めた歳	10ヶ月	10歳	3歳	6歳
辞めた歳	7歳	12歳	12歳	11歳
実績	なし	地区3位	なし	なし

表 5-4 にあるように、専門競技に専念する前には多種多様のスポーツ及び習い事をしており、重要なポイントであると言える。しかし、前述のように専門競技では早い時期に頭角を現したにもかかわらず、専門競技以外では好成績を残したわけでは無かったことも興味深い。

始めた時期に関しては、杉山は早い時期にスポーツを実施し始めているが、早い時期に専門競技を決めたことによって、多くの習い事を辞めている。6歳から自分の意思を持ち、他のスポーツを辞めざるを得ない状況にあっても、テニスが大好きで、「毎日やりたい」と自ら言ってきたことに、親である筆者は当時非常に驚いたという記憶がある。

また、インタビューで母親達が話したことの中に、専門以外のスポーツの試合には出なかったが、「随分、器用に上手くできるものだ」と、どの親も感心していたことが挙げられる。今回の対象としたアスリート全員が、幼児期には体格的に標準より大変小さかったにもかかわらず、同年齢の子供たちより郡を抜いて器用にこなしていたことも注目すべき点である。

宮里藍に関しては、習い事としてスイミングが含まれていないが、沖縄で育った彼女は小さい時から海で泳いでいたことを付け加える。

表 5-5 スポーツ以外の習い事

	杉山愛	宮里藍	錦織圭	石川遼
習い事	ピアノ、 絵画	ピアノ	ピアノ	なし
習い事頻度 (／週)	1日	1日	1日	1日
親の積極性	かなり そう思う	どちらとも 言えない	かなり そう思う	どちらとも 言えない
子どもの意思	そう思う	少し そう思う	そう思う	そう思う
習い事の動機	親の薦め	友達の 薦め	親・姉の薦 め	身体を 丈夫に
習い事をして 良かったか	良かった	良かった	良かった	良かった
小さい頃から 習い事を すべきか	少し そう思う	少し そう思う	かなり そう思う	どちらとも 言えない

表 5-5 より、スポーツ以外の習い事について調べた結果、始めたきっかけとして周りの影響を受けており、それは時には親であったり、兄弟姉妹であったり、そして友達であったりと、普段の生活の中で一緒に遊ぶ人たちからの影響を受けていることがわかった。習い事を始めた結果、最初は親が判断して始めたことも、後から振り返ってみればそれは全員の親が「習い事をやらせて良かった」と言っているが、小さい時から習い事を始めた方がいいかどうかについては、判断しにくいと語っていることも興味深い。習い事をする上で、親と子どもとの関係は、その後の親子関係に大きく関わってくるだろう。親が子どもに習わせたいことをどの様なスタンスで相対するか、強要するのか、辞めたいと行ったときに何というのか、などどの様な言葉掛けをするのか、子どもの反応に対してどう行動し、どのように言葉をかけるのかは重要なポイントになってくる。

第2節 幼児期のスポーツ教育に関する一考察

本稿の結果から以下の共通項目が抽出できた。これらをもとに考察を深めていく。

1. 外遊びを多くしていた。
2. 家族や友達と多人数で遊んでいた。
3. 遊ぶ場所を選ばなかった。
4. 専門競技の開始年齢が早かった。
5. 専門競技に専念した年齢は10歳前後だった。
6. 専門競技以外にも多種の競技を行っていた。
7. 専門競技以外の競技でも器用にやっていたと親が感じていた。
8. 専門競技を選択してもその練習時間は一日3時間程度であった。
9. 専門競技を開始した目的は「家族の団欒」であった
10. 親が「子どもに才能がある」と感じた時期は早晩やってきた。
11. 専門競技になってからの親の口出しに関しては、宮里藍と石川遼の場合はやや煩かったが、錦織圭と杉山愛の場合はあまり煩くなく、自由であった。
12. 全ての親が子どもへのサポートについて「大変サポートしていた」と回答しており、無我夢中であったと言える。
13. スポーツ以外の稽古事については、最初は親の判断で始めたが「稽古事をやらせて良かった」と述べている。

本稿でインタビューしたトップアスリートの両親達は、異口同音にこの親子関係と接し方を、自分たちのやり方でやってきただけであり、彼らがアスリートとして上手くいっているのは「偶然」の出来事だと話している。しかし、この「偶然性」を紐解くと上記のような共通項目があり、それはある意味「必然性」を帯びているのではないだろうか。

両親達は子ども達に対して、多大の愛情を持っており、自信に裏付けされた子どもに対する接し方の軸を持っていると同時に、その軸は全くぶれていない。言葉や行動で「私たちはあなたを信じている、あなたならできると思う」と表現し、子どもを信頼し続ける軸である。

自分の手を休めても子どもの話していることに耳を傾け、自分の休暇や日々の時間を子どものために時間を割くことを惜しまない。無我夢中でやってきたことでもあるが、親自身もタイムマネージメントの達人となり、子どもに時間を割くことを負担に感じていないのである。そのコミュニケーションの取り方は子どもに選択肢を与えることであり、子どもにとっては「自分は信頼されている」、「自分を語るチャンスをもたらしている」と感じることによって自信に繋がるのではないだろうか。

幼児期から専門競技を開始することによって、そのスポーツをツールとし、アスリートと親はより深い親密なコミュニケーションを取らなければならない状況を創り上げることができる。さらに、それは、単にコミュニケーションツールに留まらず、家族と一緒に遊ぶ喜びに繋がり、身体を動かす喜びを満たすことになった。

本稿で調査したトップアスリートたちは、このように親を始めとする兄弟・姉妹・友達など周りの人達からの影響を多大に受けていたことも解り、こうした生活環境が後の人格形成にも役立ち、また、競技のパフォーマンスに何らかの影響を与えていたのではないかと考えられる。決断しなくてはいけない状況を自分で判断し、行動することも後

のアスリート達がグローバルに戦う上で重要な要素になっている。従って、幼児期の多種の運動実施や習い事は人間の成長にとって重要であると考えられる。

「勝利」の結果を求めてスポーツを始めたわけではなく、「家族の団欒」として始めたスポーツが子どもと親のコミュニケーションを生み、両者を一人の人間として育てたと言えるのではないだろうか。

更に、「無我夢中でやってきた」の中からも一つ大事な共通点を見つけることができた。それは、親たちは専門競技の守るべきルールや規則は勿論、その技術を含めた情報、例えば、その競技の持つ性質、現在のマーケット将来性など、沢山のことを勉強し、もし、将来何かの理由で子どもが選手として競技を続けることができなくても、この世界でやっていけるのかどうかをも勉強し、いざという時の為に備えていることである。このようなことから、親は子どもを常に冷静に見ることができる目を養うことができているのかもしれない。そして、このことが子どもであるアスリートときちんと話すことができる理由と考えられる。

杉山愛は「あなたにとってテニスとは何ですか」と質問された時、「テニスは自分探し&自分磨きのツールです。どんなスポーツでも仕事でも、普段の生活が全てその中に出てしまうと思うのです。テニスはテクニックだけを磨いても、コート上でいいパフォーマンスはできないし、人々に感動や勇気を与えることはできません。一人の人間として、女性として充実した生活を送っていることが、いいテニスプレーヤーになることの基本だと思います。強いプレーヤーになることも大事かもしれませんが、もっと大切なことは、チャレンジし続けそれを通して自分磨きをすることだと思います。』と答えていた。

また、宮里藍も「賞金だけを追うビジネスとして割り切ったゴルフをしている選手には感動や勇気を与えることはできません」と言い切っている。

これらは正に、「勝つ」だけのスポーツに留まらず、テニスやゴルフを通じて自分の価値観や哲学・倫理観を育てることが大切であり、テニスやゴルフは「自分は何者なのか、そして自分が人間として育つためにはどうしたらいいのか」を考えさせてくれるツールなのであろう。

ここで楽しく練習する、楽しむという言葉の持つ意味について触れておきたい。楽しさは、子どもの年齢と共に変化するものだ。つまり、5歳の時の楽しみと9歳の時、13歳の時では、競技性もコミュニケーションも他人との差の意識レベルも大きく異なるということである。スポーツにおいては、勝者はいつも一人で、基本的にはどの段階かで負けることが常だ。その負けを家族で受け止め、次につなげていくコミュニケーションというものも大変重要であると言えるだろう。負けた悔しさから起き上がり、次に向かう子どもとの連帯感もまたスポーツの楽しみであり、こうしたいわば「高い次元の楽しみ」を大切にできることは、スポーツを離れた後も親子で共有できる大切なコミュニケーションのツールとなるだろう。

しかし、ここで誤解してはいけないことがある。このトップアスリート達がグローバルレベルで活躍できているのは、前述したように、ただ楽しく練習をしてきただけでないということだ。

筆者が共にトレーニングをしてきた杉山愛は、世界のトップ選手として活躍していた2000年夏、フォアハンドの握り方さえわからない程のスランプに陥っていた。当時杉山愛のコーチに就任していた筆者は、それから毎日、杉山愛と共に身体のどこの筋肉を使えば最も効率良く、力強い粘りのあるストロークを打つことができるのかを話し合いながら繰り返し練習した。そのためには、グリップの場所は何ミリ違うのか、角度はどの方向であるのか、どの指に一番力が入るべきかなど非常に細かい点まで意識し、また

それらの為に必要な筋肉も今までとは違ってきたためトレーニングプログラムも変える必要もあった。こうした取り組みによって、すぐに結果が現れることはなかったが、欠かすこと無いトレーニングの繰り返しと、オフコートでの楽しくメリハリある生活こそが、杉山愛がトップアスリートとして活躍できた所以だろう。

錦織圭も2009年夏に右肘痛でテニスができない状態に陥り、内視鏡手術を行ったが、術後の麻酔が醒め始めたときには「1ミリも動かすことができない自分の右腕、ベッドに横たわった自分、これなら24時間振り回しの方がまだましです」と述べるほど苦しい状態であった。ここから5ヶ月間、彼は毎日朝から晩まで繰り返される厳しいリハビリトレーニングを欠かさなかったばかりか、自らトレーニングを提案するなど、誰よりも自分に厳しかったが、彼もまたオンコートとオフコートのメリハリがある選手であった。

この両者に言えることは、オンコートでは自らを追い込み、常に緊張感を持っているが、オフコートでは誰をも寄せ付ける優しさと暖かさがあるということである。以上のように「真のスポーツスター」の夢を掴むためには、メリハリのある日常生活の中で、どのような状況でも他者とのコミュニケーションが必要となることがわかるだろう。筆者がコーチとして彼らの辛い時期に仕事できたのは、彼らに素晴らしいコミュニケーション力があつたからであり、それは本稿の研究結果から示唆を得たように、幼児期にスポーツを通じて家族と多くコミュニケーションをとったことによるものではないだろうか。スポーツを通じてコミュニケーション力を養い、思考回路を作る環境を与えていくことが、親が子どもに対しての最大の役目だろう。

今後も少子化が進み、周りの環境はますます複雑になっていく状況下で、親と子どもの関係は多様化し、幼児虐待などの問題も多くある一方で、一点集中の過剰教育に苦しむ子どもがいる現実にも目を向けていきたいものである。

第6章 結論

本稿は、筆者が実際に見聞した世界のトップテニスプレーヤーの事例や、実際に筆者が日本のジュニア育成の現場で受けた若年アスリートへの過剰な練習に関する相談への問題意識から、彼らへの親やコーチによる過剰なスポーツ教育に対して一考察を試みたものである。

第1章では、研究の背景と目的を述べた。世界で活躍する外国人選手の中にも、親やコーチから練習を強要されて本来のポテンシャルを十分に発揮できずに引退していった選手の事例を述べた一方、杉山愛は自らテニスを望み、テニスのみしていたわけではないという事を述べた。

第2章は研究手法である。本稿では、筆者がジュニア育成現場で受けた実際の相談の事例研究と、現在活躍している日本人トップアスリートである宮里藍、錦織圭、石川遼の親に対してインタビュー調査及びアンケート調査を行った。

第3章では、実際の相談事例研究として、ジュニア選手A、Bについて詳細を述べた。

第4章は、宮里藍、錦織圭、石川遼の親へのインタビュー調査及びアンケート調査の結果である。その結果、外遊びを多くしている事や、専門競技の開始年齢が早いこと、専門競技を開始した目的は「家族の団欒」であったこと、親は無我夢中で子どもへのサポートをしていたことがわかった。

第5章では、上記の結果をもとに考察を行った。本稿で調査したトップアスリートは、このように親を始めとする兄弟・姉妹・友達など周りの人達からの影響を多大に受けていることが解り、こうした生活環境が後の人格形成にも役立ち、また、競技のパフォーマンスに何らかの影響を与えていたのではないかと示唆を得た。決断しなくてはいけない状況を自分で判断し、行動することも後のアスリート達がグローバルに戦う上で重要な要素になっている。従って、幼児期の運動実施や習い事は人間の成長にとって重要であると考えられる。

しかし、就学前に子どもの将来の為に様々な習い事をさせる事が親の使命かと言えば、答えは否である。何故なら、アスリートの親は皆口を揃えて子どもの成功を偶然であると捉えており、意図的に選手として育てた訳ではない。全て子どもが望んだ結果やらせた事であり決して強制はさせていなかった。つまり、「勝利」の結果を求めてスポーツを始めたわけではなく、「家族の団欒」として始めたスポーツが子どもと親のコミュニケーションを生み、両者を育てたと言えるだろう。

以上のように本稿の結果より「真のスポーツスター」の夢を掴むために、親は子どもに対して、スポーツを通じてのコミュニケーション力と思考回路を作る環境を与えていくことが最大の役目なのだと知ることができた。

今後も少子化が進み、周りの環境はますます複雑になっていく状況下で、親と子どもの関係は二分化し、幼児虐待などの問題も多くある一方で、一点集中の過剰教育に苦しむ子どもがいる現実にも目を向けていきたいものである。

謝辞

本稿は、指導教授である平田竹男教授の温かくかつ厳しいご指導無くしては完成に至りませんでした。この一年間のご丁寧なご指導に対し深く感謝すると共にお礼を申し上げます。

そして、副査を務めていただいた中村好男教授、村岡功教授をはじめ、早稲田大学スポーツ科学研究科でご指導をくださった教授および講師の皆様はこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

また、シーズン中のお忙しい時にも関わらず、度重なるインタビューを快く引き受けてくださったアスリートのご両親の皆様（宮里優氏、宮里豊子氏、石川勝美氏、石川由紀子氏、錦織清志氏、錦織恵理氏）には大変お世話になり、感謝申し上げます。

最後になりましたが、共に勉学を勤しみ、時には冗談を言い合い様々な話題を提供してくださった平田研究室 5 期生・社会人 1 年制コースの皆様、取り分けお世話をしてくださった幹事の長久保由治氏、豊池潤一氏に感謝を申し上げますと共に、修士 2 年制コースの皆様、最後まで叱咤激励してくださった畔蒜洋平氏、間仁田康祐氏、どんな時でもニコニコと励まし続けてくれた二人の娘・愛と舞に心から感謝の意を表したいと思えます。

どんなに感謝してもしきれません、皆様本当にありがとうございました。

参考文献

- 1) 佐々木卓代 (2009) 子どもの習い事を媒介とする父親の子育て参加と子どもの自己受容感, 家庭社会学研究, 21 (1) ,65-77 頁
- 2) 武田 大輔、中込 四郎 (2003) 子どもに対する親の行動に伴うメッセージと競技における子どもの認知・情動的態度との関係:ジュニアサッカー選手を対象として, 体育学研究 (48) 421-438 頁
- 3) 永井洋一 (2004) スポーツは「良い子」を育てるか NHK 出版 222 頁
- 4) 永井洋一 (2007) 少年スポーツ ダメな指導者 バカな親 197 頁
- 5) 永井洋一 (2010) 賢いスポーツ少年を育てる 大修館書店 245 頁
- 6) 深代千裕之(2007) スポーツができる子になる方法 株式会社アスキー 222 頁
- 7) 菅原裕子 (2007) 子どもの心のコーチング PHP 文庫 251 頁
- 8) 吉井妙子 (2003) 天才は親が作る 文藝春秋 291 頁
- 9) 野村るり子(2009) 3年あれば天才は育つ 223 頁
- 10) 芦沢俊介 (2008) もういちど親子になりたい 189 頁
- 11) 井上俊・亀山佳明(2006) スポーツ文化を学ぶ人のために 348 頁
- 12) 生島淳 (2005) 愛は天才じゃない 191 頁
- 13) 上田武司 (2010) 一流になる選手消える選手 197 頁
- 14) 中村敏雄 (2001) オフサイドはなぜ反則か 297 頁
- 15) 多木浩二 (2009) スポーツを考える 206 頁
- 16) 鈴木秀人 (2002) 変貌する英国 パブリックスクール 249 頁
- 17) Joel S. Brenner,MD,MPH and the Council on Sports Medicine and Fitness ; Clinical Report: Overuse Injuries, Overtrainig, and Burnout in Child and Adolescent Athletes 2007
- 18) Department of Movement Science and Physical Education, University of Liverpool,Liverpool, UK
- 19) *correspondence to:Dr V. B. Unnithan, Exercise and Sport Science, University of San Francisco ; Overtraining in child athletes

付録

宮里豊子（母）インタビュー記録

杉山：今日お目にかかったのは、いろんな聞いてみたいことがたくさんあります。お近づきになって、いろんな話を伺っている方が、いろんなお話を聞くことができるのじゃないかと思うんですけども。

私が一番やりたい研究というのは、選手である前に人間的に素晴らしい人がトップに行けるというのをなんらかの形で証明したいんですね。私はすごくラッキーで、杉山（愛）を育てたあと、錦織圭くんが日本で手術をして復帰するまでのあいだトレーニングを一緒にやらせてもらい、森田あゆみちゃんという子どもトレーニングを見させていただきました。錦織君はすごくナイスな子で、あゆみちゃんも素晴らしい人なんです。テニス界のトップの選手は、人のことを思いやれたり、みんな不思議がるかもしれないんですが、試合のあとに握手をし、裏に戻ってくると、「今日はあなたにやられたわ」と心から言えるような仲なんです。

でも、日本のゴルフ界に目をやると必ずしもそうは言えません。宮里藍ちゃんや石川遼くんのチームに2日間チームに帯同させてもらって気付いたのは、世界で通用する選手には人間力があるんですね。藍ちゃんの今年の活躍も含めて、私のテーマにぴったりだと思ったのです。私はそれをなんとか証明したいんです。そういうことを証明するとき、やはり小さい頃にお父さんやお母さん、兄弟、家族の力はすごいんだろうと思うのです。

と、勝手に思ったところからスタートしています。ご主人のゴルフの指導の方法も含めて、「心が大事だ」とおっしゃって本も出されていると思うんですけども、お母様の感じるところをお聞かせいただきたいと思います。藍ちゃんは何歳の時からゴルフを始めたのですか。

宮里：彼女は、4歳からですね。

杉山：それはお兄ちゃん達がやっているもので、私もという感じで？

宮里：そうなんです。最初は3歳からピアノを習い始めました。長男の聖志とは9歳、次男の勇作とは5歳離れているので、藍が小学校にあがる時には聖志はすでに高校生でした。一緒にキョウガクもないんですよ。だからずっとおにちゃんのあとを金魚のふんのようについていく状態でした。

当時は「大きくなったらピアノの先生になる」って言っていましたね。お兄ちゃん達はゴルフをやっていましたが、藍は女の子なので、ピアノを弾きながら、音楽の聞こえてくる、なごやかな家庭が築けたらというくらいで。女の子はお嫁に行ってもピアノの先生になれるので。だから「ピアノを一生懸命にやって、そっちの方に進んだら」、なんて言っていましたね。ピアノは小学校5年生までやっていたんですよ。でも、土曜日・日曜日に練習で上の2人のゴルフについていくと、2人に教えていることをそばで聞いているんですよ。そうし

たらいつの間にか藍の方がうまくなっていったんですね（笑）。

杉山：それはどのぐらいやって？

宮里：小学校の1年生の時に初めて大きなコースに出たんですね。初デビューだったんですね。そのときにレディースティーから回って、111で上がったんです。でびっくりしました。これがデビューだから記念に撮っておこうと思って、その時の写真などを残しておいています。そのときはまだピアノもしていましたし、そこまでゴルフでやっていくというわけではなかったんですね。お兄ちゃんたちを見ながら、見よう見まねでやっていたんですけど、だんだん、それが逆になりだして（笑）。結局、いまは上の子達は、「うちの稼ぎ頭ですから」って言ってますからね（笑）

杉山：冗談でもいつもおっしゃられていますよね。

宮里：最初からゴルフをさせようとしていたわけではありませんでした。主人が教育委員会で勤めており、非行があったり、親子の会話がななどさまざまな家庭環境を見ていて、なにかを通じで教育できるものがあったらいいなと思っていたんですね。それがたまたまゴルフだったんです。

杉山：うちも「家族でテニスができればいいね」というところからスタートしたのです。愛は小学校1年生から試合に出始めたんですけども、私のスタンスは「負けても別にいいじゃない」という感じだったんですよ。本人はひどく悔しがっていましたが、こちらとしては「家族で楽しくテニスができるということ」が一番で、つまづいたときに初心に戻ればいいと。もっと大きくなってからもつまづいたときなど愛に対しては、そこに戻ってきていましたね。家族みんなが健康でテニスができるんだから幸せなんだって。試合で一喜一憂しなくてもいい、というところに戻れたのです。

宮里：最初に聖志が生まれた時に、私達職場が一緒だったんですね。主人がちょうどゴルフを上司から習って、ちょこちょこやり始めていた頃なんですけど、大人のクラブを保育器に入れていいですかって聞くんです。それを先生に怒られて、「そんなことできるかっ！」って（笑）。勇作や藍とかとそういう話をするとき「お父さんこういうことがあったのよ」ってみんなで笑い話になっています。本当にゴルフを通じて、いまは共通の話題ができて、いつでもそれに対して自分の思っていることを「自分はこうしたい」と対等に話し合える、いい形で会話が出来ているんですよ。

一時期周りの子ども達を見ていて、そういうことがあったので。だからゴルフだけではなくて、小学校の間は学習発表会や童話大会などの学校の行事を優先していました。とにかくそういうものを中心にやって、空いた時間にちょっとゴルフの練習を試してみようと。

ゴルフができるような経済状況でもなかったので、学校の近くに公営のグラウンドがあるんですけども、ボールにマークをつけて、打ったボールを拾って袋に入れたりしてきて、という感じで練習していました。

なので、子どものその時期しかできない、学校の行事を大切にしていました。それを超えてゴルフに集中してしまっただけで行事に参加できないということになると、長い目で見て、本当に自分が、あのときこうしたかったな—という後悔の念を持ってしまうかもしれませんよね。将来にいい思い出がなくなったら...

学校が小さいんですよ。幼稚園から中学 3 年までみんな一緒なんです。幼稚園から中 3 を卒業するまでホントに兄弟のようです。だから、ホントに 1 クラス 25~30 人くらいで。隣近所の子ばかりなので、名前を言えばどこの子かわかるというような感じですよ。田舎なぶん、地域の雰囲気はよさはありました。

杉山：そうすると 4 歳からお兄ちゃんたちについて行って、ママも練習は一緒にみたりするんですか。

宮里：私もアマチュアで少しやっていたものですから、主人も含めて毎週末、家族一緒に 1000 円で打ち放題という練習場に行くわけです。小学校を卒業するまでくらいは一緒に行っていたんですが、だんだん足手まといになりまして。今は 1 年に 1 回クラブを握るか握らないかですね。週末になると男子のトーナメントがあるから応援に行ったり、藍が帰ってきたら国内の選手と旅行に行ったり、それでいっぱい、とても自分のゴルフというのは...

杉山：藍ちゃんが試合に出始めて、彼女ももちろん負けん気が強いわけですよ。負けたら悔しいわけですよ。

宮里：そうなんです。小さい時から、沖縄の方言で「しきらー」と呼ばれてまして、要するに「しきり屋さん」という意味なのですが、いつもクラスやチームのまとめ役をやっていて、よく「しきらー」と呼ばれていましたね。

杉山：では今のはっきりした喋り方は昔からああいう感じで。

宮里：地域で小学校の童話大会という、童話を覚えて、自分で理解して、表現する学校の大会があったんです。それは学校大会の次には地区大会があり、そのあと県大会と続いていくのですが、それを目指してまず、一番上の兄の聖志がやりだしたんですね。すると二番目の勇作も始めて。勇作がそばで練習をしていると、藍もそれを覚えるんです。で、その練習を毎日、時間を計ってやるのですが、最後に家族みんなが座って聞いていて「始めー」なんて行ってやっていたのです。すると藍が言うんですよ、「お兄ちゃん、そこ間違っているって」。一緒になって覚えているんですよ。上の兄達を見てきているものですから、小学校に上がったときには、自分もやりたい、童話大会に出たいと言うんです。そして、その後毎学年、学年代表になり、地区大会、地域大会までいきましたね。これは 3 人ともそうでした。だから、人の前に立って話をする、童話に対

して自分の感じたことを表現するということは、そこでできるようになったと思います。いろんなところにつながりがあると思います。私たちはそれはとてもよかったと思っています。

兄弟で、上から下に自然にそういう風に向いていったのが、いい形になったと思います。主人の撮った 8mm に童話大会の練習の様子が残っているものがあるんですけど、今でも懐かしく見ますね。また、学校自体が小さかったのでもんなスポーツをオールラウンドにやらなければならなかったです。

杉山：それがでも、後のちよかったんでしょうね。

宮里：そうですね。野球とバスケットボールをやっていました。最初は野球もあったんですが、人数が 9 人揃わないんですよ。小学校までは少年野球があつて、中学校に入ったらもうバスケットボールしかなかったんですよ。男女とも吹奏楽部とバスケットボールだけです。本人たちはバスケットボールを毎週楽しくやっていました。8 月は陸上のシーズンで、みんな陸上競技をやるんです短距離に出たり、リレーに出たり。藍なんかもそういう形 200m のリレーなどでよくやっていましたね。とにかく本当に人数が少ないので、すべてやらないと学校自体でそういうことにチャンスがなかったんですよ。

杉山：「テニスにどれだけ集中してきたんですか？」なんて聞かれるんですけども、うちなんかも彼女（愛）は身体を動かすのが好きで、本当にいろんなことをやっていました。体操や、バレー、アイススケートなど、で、最終的にやっぱりテニスが好き、ということテニスを選びましたけれど、やっぱりそれがよかったんだって思うんですよ。

宮里：同じようにピアノをやったり、書道教室に行ったり、あれこれやったんですけども、最終的には 5 年生の後半にはゴルフに行きました。小学校 6 年の時には世界ジュニアに行っていました。

杉山：なるほど。小学校の 5 年生になって、本格的に始める前から練習時間というのはだんだん増えてはいたんですか？

宮里：学校の授業を終えて、宿題をやって、それから主人の練習場まで行くのですが、東村から名護まで 30 分かかるんですよ。毎日というわけにはいかないので、勇作が小さい頃に庭にパターングリーンをみんなで耕して作りました。芝を植えて、水銀灯をつけて。夜は近くからアプローチの練習とパターの練習ができました。ボールを打つのは大きな練習場に行かないとできないのですが、古いボールを袋に入れていつもおいてあるので、グラウンドに行って、端っこの方から隅のほうに向かってボールを打つ練習をしていました。そこはみんなの運動場なので、本当はボールを打ちちゃいけないんですけど、練習場に行けないときはそこで練習していました。

週末になると主人が練習場に連れて行って、1 週間に 1 回練習していました。

小学校の間はそういう感じでやってきました。しかし、中学校になるとそうはいかなくなり、やっぱりちゃんとトレーニングだったり、練習だったりなので。その頃から高校進学のために塾にも通わなくてはいけなかったのです。

私も 2 年前に退職したのですが、それまでは公務員としてずっと働いておりました。働かなければ資金が大変だったので。とにかく、学校の授業が終わったら、私も一度家に帰ってきて、ご飯を食べさせ、それから塾に連れて行き、塾が終わるまで待ち、1 時間でも練習場に行きたいと、11 時の閉店まで 1 時間はボールを打って、それから帰ってきていました。なので 1 日 2 往復していましたね。

杉山：愛の学校がお迎え禁止だったので、学校から少し離れたところで待っていて、愛を拾い、作ってきたお弁当を持ってきて車の中で食べさせ、練習場におろし、また、家に帰ってきて、夕食のお弁当を作ったという生活でしたね。しかも下の子と 6 歳半離れているので、下の子のこともやらなければいけなくて。どこでもみんな同じですね。しかも、そのときは大変っていう気持ちじゃないんですよ。

宮里：やらなきゃいけないっていう気持ちがあるんですね。疲れたとか言ってもらえないんですよ。仕事が 17 時 15 分に終わって、急いで帰らなくちゃと。おばあちゃんもちょうど 92 歳まで元気で、ずっとクリスチャンで穏やかな人だったので、「ただいま」というと「おかえり」という言葉が返ってくると子どもたちは安心するんですよ。小学校までは共働きでみんな鍵っこだったので、職員住宅で、おやつを準備しているから知らない人が来ても開けちゃだめよっという感じで。高学年になると、帰る時間も同じくらいなのですが、低学年の頃は心配で。お昼時間に急いで帰って、お弁当を準備していました。

杉山：そうなんですよ。今お話を聞いているだけでもすごく大変なことですよ。時間が経って自分がやってきたことを人に語っていると、結構すごいことやってきたじゃないって思ったりするんですよ。でも当時はね。無我夢中というか。

宮里：主人もお互い公務員だったのがですが、聖志が中学 3 年生の時に、藍が 6 歳の時に、市町村の教育委員会を辞めて、村長選挙に立候補したんです。みんなからも出てくれといわれて。結局接戦で結局負けちゃったんですが、1000 人ちょっとしかいない村なので、選挙の結果というのがすごく大きいんですね。だから結局、退職したけれども職に就こうとしたら、仕事が全くなくて・・・本当に苦しい思いで、収入が得られない状態になったんです。そのときに、主人はもともと指導するのが好きな人だったので、資格を取って、ティーチングプロを目指したんですが、それまでの 4 年のブランクの間は、私 1 人の給料でなんとかやっていかなきゃいけませんでした。ボーナスは手をつけずにそのままおいて、7 月や 8 月にある子ども達のジュニアの大会の遠征費にあてていました。

杉山：そのお話を聞いていると鳥肌が立ちますね。

宮里：その時は本当に苦しくて。主人はこの子達だけの練習しようと思ったくらいでした。

杉山：パパも希望に満ちているから、苦しくても苦しく思わないということもありますよね。

宮里：あの状態があって、この子たちが試合で勝ってすごくいい表情で話しかけてきて。生きててよかったって聞いたときに。

そこからプロとして、練習場の一角を借りてやり始めました。でも最初は個人からの1ヶ月5000円の月謝が収入だったので、月5~6万くらいにしかありません。でもないよりは少しでもあったほうがいいので、それでやりくりしていました。子どもたちは親の大変な様子を見ていましたので、聖志が、高校に行ったときも、仕送りを入れていましたが、贅沢はしていなかったですね。「学校での必要経費だから全然気にしないで使いなさい」と電話していたほどです。そうこうして大会で結果を残し、大学に行きプロになったんですが、プロになる前も波乱万丈でした。

大学で遊びほうけてしまって大学からクレームが来たんです。それまでは日本で3本の指に入るくらいの飛ばし屋で、ジュニアでも大阪桐蔭高校のキャプテンをしていたりしたのですが、大学に行った途端、いろいろな遊びを覚えてしまったんです。で、このままでは人間がダメになると、2年間プロテストを受けるために主人が呼び寄せたのです。聖志は人が教えられない部分ですごくいいものを持っており、天性の分というのがあったんですね。

ちょうどプロテストに合格したときに、おばあちゃんが風邪を引いて入院していたのですが、院内感染でこん睡状態になっていたのですが、聖志が「通ったよ、おばあちゃん」と言った時に目を開いて、万歳をしたんです。そうしておばあちゃんは亡くなりました。

聖志はそういうことがあって、藍もそういう状況を見てきて、お兄ちゃん達も大変だったし、おばあちゃんも自分たちが活躍するところをいつかテレビで見たいよねって。それが今では3人とも同じ職業で、こういう形でそれができたんですけれども。

練習も藍だけは全然手を抜かないんです。すべてに対して、勉強もするし、練習も手を抜かない。「勇作兄ちゃんみたいになりたいって」。でも勇作はどっちかという、「明日もあるから大丈夫」という、温厚な部分があり、だから逆に藍がすごく頑張るので可愛がるんですよね。そして藍もそこからいろんなものを吸収していきましたね。

杉山：高校から沖縄を出られたんですよね。

宮里：高校から東北高校で。

杉山：東北高校に行くことをいつ決められたのですか。

宮里：聖志がゴルフをするときに、沖縄にはゴルフができるクラブも環境的ありませんでした。しかし、本土の方には学校にクラブがあって、いろんな大会に出ることができたのです。たまたま大阪桐蔭の監督さんとお知り合いになり、会ってみようということになり、そこで、1球ボールを打つところを見てもらい、すぐに決まりだったんです。いいものを持っていると。そのときはPL学園に推薦書を断られたあとで、聖志が大阪桐蔭高校で3年を過ごしているのを、勇作はそれを見て育っていましたから、自分も大阪桐蔭に行きたいと言って、大阪桐蔭に進学しました。聖志が土台を作っていたのですが、最初は後ろ髪引かれる思いでした。で、聖志も近畿大学に進学したので近くだったんですね。なので、高校3年間は聖志が面倒を見てくれて、なに不自由なく彼は、過ごしてたんですね。

でも大学では星野英正くんが中心になって活躍していた、東北福祉大学に行きたいと言い、東北福祉大学進学したのです。そうしたら大学3年のときに、藍が高校に進学する年で、いろいろと悩んだのですが、勇作の近くだったら一緒に練習もできるし、環境などもいろいろと調べて、じゃあ東北高校がいいかなど。

杉山：それはいままでお父さんの指導を受けていて、ご両親としても不安はなかったですか？

宮里：男の子は放っておいてもいいかなと思うんですけれども、女の子は最初はどうしても、生活はうまくいっているか、寮の仲間とうまくいっているかどうか、周りの環境はどうなんだろう。とすごく後ろ髪を惹かれましたね。ゴルフ的には、勇作もそうでしたが、お父さんが先生なので、他の人からベース的なものは受けないというのが基本のスタンスでした。

杉山：なるほど、いじるものはなかったんですね。

宮里：そこは徹底していたんです。勇作が進学して1年生の時にダメになったんです。やっぱりいろいろと今まで自分がやってきたもの以外に、吸収しなくなってやった結果、1年を棒に振ってしまったんです。それで主人がこれじゃいかんと、監督さんとお話をして、それから立て直して、そこからまた良くなったんですね。悪くなったら電話でアドバイスをし、試合のときにもし何かがあれば、お父さんがかけつけるというように、連携をとっていたんです。

それを藍も見てきていたし、上の2人よりは彼女の場合は技術的なものに関してはいいい形で入っていたので、あまり直さなくてよくて、悪くなった時に、電話をしてワンポイントのアドバイスをするというような形でしたね。あとはテレビやビデオで撮ったものをみて、電話でやり取りをして忠告していましたね。それはうまくいきました。一番崩れたのが勇作でした(笑)。

いろいろな人の練習方法を見て興味を持つんでしょうが、それがいいときもあるんですが、それを長い目で見た時に、いい結果につながるのかということです。うちはやっぱりお父さんが絶対だったので。でも、いつまでも親がついていくわけには行かないので、ある程度は自分でそれを修復する力もつけなければなりません。ちょっとここが悪いと思ったら、直す力をもたなければいけない。藍はそれをアメリカに行って、そこから少しずつ自分の練習方法を見つけて、吸収して、最近では、自分でちょっと変かなというときくらいしか電話はしませんね。

杉山：高校行った時、沖縄からはなれた時、アメリカにいったときに、ママには個別に電話があったりするですか。

宮里：主人は藍とはメールをしないんですが、私は自宅のパソコンでお互いメールでやりとりしています。「お父さんが電話取らないんだけど、今なにしてるの？」とか。藍がお父さんと連絡が必要な時にも、私にメールが来ます。

杉山：ゴルフの話なんかはあんまりなさらないんですか？

宮里：あんまりゴルフの話はしないですね。技術的なことは主人と話していますし。同じゴルフをしていますので、気持ちはわかるので、簡単なやり取りはしますが、どっちかというといふ愚痴を聞くほうですね。

杉山：私も、お母さんみたいな役でずっと来たんですけども、彼女が引退する最後の9年間をコーチに任命されたのです。私は他の選手も見ていたんですけども、彼女がガタガタになっていたんですね。それで、ママしかいないということで私がコーチになったんです。それまでは、母親としては、宮里さんのお母さんがおっしゃったとおり、「頑張ったんだからいいじゃん、次また頑張れば」と、ずっとそういうスタンスで来てたんですよ。それが、コーチになったとたん、それじゃダメじゃないですか。「明日の試合のために、あそこを確認するためにコートに行こう」と。愛自身も自分の背中を自分で押さなきゃいけない自分がいて、スイッチの切り替えにツアーに出てから1年間苦しみましたね。

ツアーに出ている、試合の反省会が終わらなければ夕食をしないし、夕食は親子として、テニスの話じゃない話をしようと思ったんですよ。すると反省会が終わらなくて、夕食が夜中の12時、1時になっても食べれない日があったりするんですよ。そのスイッチをコントロールするのに時間がかかって。なので、その辺はやっぱりママのところには帰ってこれる。おばあちゃんがお帰りと言ってくれるのと同じように、お母さんがお帰りというような。

宮里：今までが共働きでうちを留守にする、3年したら転勤があるので残業があったり、一旦かえって夕飯を作って、また仕事に行ったり。結構そういうこともあったんですよ。お年よりも抱えているから、もう少し融通が…。こう言っ

てはあれなんですけれども、会計事務でも 6 時には帰れるようにと上司に相談して、変えてもらったりとか。そういうこともありました。

杉山：大変ですよ。よく頑張られましたよね。

宮里：本当にもう、がむしゃらというか、やらなければ生活ができないし。あの子達も試合も出さなきゃいけないし。そのときは何とかしなくちゃという思いですよえね。だから、苦しいとかということもなかったですね。いま考えてみたらよくがんばったなって思いますけどね。

杉山：そうですね。当時はね、本当に無我夢中でね。

宮里：ああいう苦しさがあったから、今があるんだと思いますね。彼女が挫折をしたときも、ゴルフをやめたいということを出して。

杉山：それはいつですか、最初は。

宮里：もう 2 年前ですね。今もう 2010 年ですから。2007 年か 2008 年です。苦しかったですね。どうやって声をかけていいのかわからないくらいに。

杉山：そのときは藍ちゃんは何歳ですか？

宮里：20 歳でもうアメリカに行っていましたから 21 歳ですね。だから、アメリカのツアーに出て 2 年目です。国内のプロになって 2 年間は、自分が思っている状態で臨めて、結果を出していました。なので、このままアメリカに行けば結果が出るだろうと。大変かもしれないけれど、ひょっとしたらひとつくらい勝てるかなって周りもそんな気持ちがあったんですね。本人もツアー出場資格の予選会をトップで通っていたので、いい形でツアーに入っていたんです。

しかし、言葉の問題がある、環境が違う、時差があるなど、さまざまな障害が取り巻いて、1 年は無我夢中でやって、それが、2 年目になり周りが見えてきたときに、すごく苦しい状態が続いていたのです。結果が出ずに、優勝したいという気持ちばかりが先に出る。しかも優勝したいという気持ちは持っているけれど、常にそればかりが先に出てしまって、結果がついていかないんですね。

杉山：そのときは、お父様とお母様への連絡の頻度、メールのやり取りも含めて、どちらの方が多かったんですか。

宮里：藍からは「苦しい」というメールが延々と来ていましたね。電話で伝えられない時はメールでやって。藍からこういう内容でメールが来てるよって、苦しい状態みたいって主人に伝え、主人が電話を入れて。電話で長い時間主人

が話してと。

だからどういうサポートをしてあげるべきか、声もかけられない状態で、頑張れとも言えませんでしたね。とにかく彼女の思いを聞いてあげて、「みんな苦しい時期というのを抱えているわけで、そこを通り抜けて初めて、絶対何かは自分の中で見つかるから、本当に我慢の時かもしれないよ」ということは伝えていましたね。そしたら本人も「わかってる。でも、なんかつらい」って。そのときに、アニカソレンスタムのメンタルトレーナーのピア・ニールソンさんにお世話になったのです。

1月から気持ちを新たにするために、それまではとにかくメンタルが弱くて、優勝へのこだわりが強すぎました。そうではなくて、いまは目の前の、いまふりかかっているこの部分をどうしようかということから始め、ピアさんのところに行くようになってから、少し考え方がかわってきたんです。そこでは「なにをしたいの?」「これに対してどう思っているの?」と全部投げかけて、それを繰り返しながら、彼女の考えている気持ちだとか、いろんなコンピューターをかけるんです。どういう人のときは赤になるとか、すごく東の海をいかに考えて、心が穏やかになったときには、ブルーになって。そういうのを見て彼女もびっくりしたんです。こういうことがあるんだって!ここで今まで味わったことのないメンタルなものを、そこで見て、なるほどって。それから少し気持ちが変わりました。そのときは主人もしばらくは技術的なことを言わずに、藍がどうしたいのか、しばらく静かに見ていましたね。

杉山：苦しんでから、ピア・ニールセンのところに行くまで時間的にどのくらいあったのですか？

宮里：知り合ったのはスランプに陥るその1年前なんです。それまでは会ったときに少し話をするくらいで。実際彼女のところで合宿をして、ちゃんとやろうと思ったのは、そのあとなんですよね。アメリカでの1年が終わりかけのころから、ちゃんとしたメンタルな契約を結んで。マネージャーがシアトルにいて、彼を通じてコンタクトが取ってもらい、主人も交えて話し合いをして、じゃあ、やってみよう。

それで週2回行って、本人も気持ちとか、今まで苦しい、苦しいと思っていたのが、考え方がどんどん変わるようになって。

それまでは、回りからの期待に応えなきゃいけないと、優勝にとらわれすぎでいたんですね。そこでいろんなものが葛藤して。技術的なことでボールを打つことから、右左のバランスだとか全てのことが崩れていました。極端に左だとか。ミズノクラシックのときなど、構えたときから見れないくらいでした見られないんですよ。技術的なことが全然違う状態で、本人が空回りして、綺麗なスイングをしていたも、「こうじゃない、こうじゃない」って思い始めたら、どんどんどんどん当たらなくなってきた、そんなに悪い形じゃないんですよ。とにかくドライバーが使えなくて。ただ、それで怪我の功名じゃないですけども。ドライバーと同じような飛距離が出るようになりました。彼女の武器になったんです。

杉山：今年の好調な感じになる前は、ピア・ニールセンが「藍は藍らしくて」って書いていたと思いますが。

宮里：「拳銃を持っている侍だ」って言ってました。だから、自分の持っているものを表現すればいいんだよって。どうしてほかのことをやろうとするの？って。

杉山：とういうようなこともおっしゃっていましたよね。

宮里：そこから少しずつ、「どうして自分は今までやってきたことをやっていないんだろう」と自分で気づくようになっていきました。原点に立ち戻って、「日本で優勝していた時のDVDををお母さん、送って欲しいって」優勝シーンは全部DVDにまとめていましたので、そのときのプレーを見て、こういう形でやっていたんだと、彼女が原点に立ち戻って試合のビデオを見て、なんでこんなに楽しそうにスイングしているのって。いまどうしてこんなつらい状況にいなきゃいけないのかなって。それを試合のシーンを見て、昔の自分を思い出して？

杉山：そのときのスランプから抜け出すまでの時間というのはどのくらいだったのですか？

宮里：割と早かったですね。2008年、2009年は結果が出ましたから、08年の半年くらいですね。

杉山：愛と同じですね。愛も半年くらいかかったんですよ。

宮里：半年くらいは本当に打ちのめされたような状態でした。それで2008年が終わって、09年度のスタートからはピアさんのところに通っていたので、すでに考え方が変わっていましたね。試合の前に、「優勝を狙うには、どこを攻めますか」などいろいろと聞かれても、「いえ、自分は今そこまでは考えてはいません」と。いま自分に課せられているのは、目の前の一打をどう打つか。まずそれを集中して考えるようになっていました。昔のパターン、昔のリズムを取り戻したいと。それから目の前の一打集中というのが彼女の口癖になりました。そうすると、今までのスイングが戻ってきたんですよ。だから本当に、あの苦しいときはなんだったんだろうと、彼女も振り返ったときに、「こんなこと言ってたんだって」「苦しかったけど、あの苦しさがあって、あれを自分で克服よかった。いまはすごくゴルフが楽しい。

杉山：では、今年の開幕の様子を見てどうでした？

宮里：私は勝てると思っていませんでした。でも、主人もアリゾナに行って、いい2週間を送ったようで、いい形で仕上がってるとは言っていました。ゴル

フは練習でいい形で仕上がっても、即結果に繋がるものではなく、そのときその時にどういう状況になるかわからないから、とにかく自分が感じているリズムを大事にして、優勝とか全く意識はしないで、それがうまくいけば、結果が繋がってくる。とにかく楽しむようにと。今まで、その楽しさを忘れてたんですよ。

杉山：そこは大事ですよ。

宮里：「どうして苦しい思いをしながらやるんだ。もっと楽しんでごらん」って。言うのは簡単なんですけれどね。でも、今はミスをして、表情に嫌な顔は出さないし、笑ってそれをキャディに「やっちゃったね」と受け流しながら、やっていく。嫌な顔をした瞬間に、それが次のホールに大きく響くので、それを笑って受け流す。それができるようになってきましたね。

杉山：同じですね、それはテニスも。

宮里：今年の開幕はそれがテレビで見えてもわかりました。ダブってしまっても、笑っているんですよ。少しずつ感覚を自分で覚えてきたなって。また、予選に落ちてあまり気にしなくなりました。決して調子が悪いわけではないですし、本人もいい形でプレーしているので、「今週は自分の日じゃなかった」と思って、いい形で気持ちを切り替えられるようになりました。振り返ってみれば苦しいときがあったから、今があるんですよ。

杉山：試合は見に行かれないのはしないんですか？

宮里：アメリカの試合は毎回は見に行かれないので、visa、全英女子オープンと、ナビスコ、この3つは行っています。その期間に一軒家を借りて、1週間炊飯器とお米を持って言って、おにぎりを作ったりしています。せめてその時期しかサポートできないので。今までは勤めもあったので、会社の休みをとってきました。今は退職して、メジャーだけはいくようにしています。

杉山：いまはすごくいい時期ですよ。

宮里：だから日本の試合に帰ってくる時は行って…。上の子たちも欲しいからお母さん送って一って。箱に一杯作って送っても、「俺、一個しか当たらなかった。みんなに食べられてしまった」って(笑)。それで彼らの気持ちが少しでも和らいできたらいいなあと思うんですよ。

杉山：本当に素晴らしいですよ。

宮里：何年もなんにもしてあげられなくて。この時期だけでも。

杉山：じゃあ、これからはもう、最高の時期ですよ。

宮里：腰が曲がらないように、歩けるうちはね（笑）。毎回応援には行けないし、狙うというよりも、最初から優勝を狙うのではなくて、いい形で臨めれば、結果よりも楽しくゴルフができればいいんですよ。

杉山：そこに戻るといえるか。ほんとにねー。

宮里：最近では「今週は予選落ちたけど、悪い状態じゃないからまた来週楽しんで来るからねー」ってメールが来ます。少し充実していますね。半年くらいは自分の居場所が見つからない時期でしたから。半年ほどしてハワイの試合でいきなりインタビューで呼ばれたんですね。解説席に。えっ、行っていいの？って。どうしよう。何しゃべればいい？って。十分に会話もできないころに。向こうもゆっくり話してくれて、うまく返すことができたーって。ドキドキしたけどーいい経験になったって。

杉山：自分の気持ちをどんなにつたなくても、自分の言葉で伝えられるというのはファンも増やしますしね。

宮里：英語に関しては辞書をずっと持っていました。「自分から声をかけて溶け込む姿勢がないと、ずっと黙っていてはアメリカの人はお客様としか扱わない。自分を仲間として認めてくれない。あなたを覚えられないよ。何この人誰？」って。もともと高校生時代にアメリカンスクールに行って、そこで自分から話したことがあったので、それがいま、いい形で違和感なく入れたというのがあると思います。

「試合が終わったらご飯食べに行かない」とか、「どこに何があるの？」って辞書を見ながら声をかけていました。そうすると、会話を一生懸命やっている姿勢を見て、結構いろいろサポートしてくれるんです。そうして、早い時期に受け入れてもらって、自分の場所を見つけることが出来ました。グリーンで練習していても、どこからも「アイ」って声をかけてもらえています。各プレーヤーから藍が「アイ」と声をかけてもらっているのを初めて見たときに鳥肌が立ちましたね。本人がそれだけ話せない分、辞書を持って努力をした者が結果として報われたんじゃないかと思います。逆にそれをやらなければ何年いても英語というのには覚えられない。

杉山：そうなんですよ。やっぱりみんなすごいな。共通してみんなそうなんですよ。

宮里：だから、努力しなきゃいけないんですよ。早かったですね。1年もしたらみんなと生活には困らない英語を話せるようになっていましたね。

杉山：それがツアーに馴染むコツですもんね。

宮里：そうですね。同じトーナメントでも、主催者やサポートしている人たちは、メジャーは持ち回りなんですけど、そうすると、そこをずっとサポートしている人が名前を覚えていてくれて、行くと「藍久しぶりー」って、ハグをして「元気だった？」って。それがやっぱりつながっていくんですね。

杉山：それが自然の生活なんですよ。

宮里：一番感じたのが、全英の去年の試合に行ったときに、若いジュニアの女の子達3人くらいの女の子が、「藍、ウィナー」ってうそこれ持ってる？そしたら、マネージャーが、藍ちゃんのお父さんとお母さんだと紹介してくれたんです。すると、とても喜んで「彼女のプレーがとても好きです。3年くらい前から、イギリスに来たら自分たち...。本当に全く知らない状態だったんですが。自分たちも高校でプレーしているが、高校の先生が参考になるから見てきなさい、と見たのがきっかけで、藍のファンになった」って言うんですよ。もう何年も試合に来てくれていたみたいで、嬉しくて。プレーヤーというのは周りの人に夢を与える職業だと。嫌な顔をしていたら、見ている方も暗くなってしまう。辛いときでも、苦しくてもいつも笑っていなくちゃいけないと思います。

杉山：愛も「あなたのスマイルがパーフェクトだわ」って海外なんかで言われると嬉しいですよ。

宮里：藍が苦しいときでも笑っているのを見ると涙が出ちゃうんですよ。お嬢さんと重なる部分があるからなんでしょうね。名前もですけど（笑）

杉山：そういうのを思うと、素晴らしいと思うんですよ。見ている人たちに夢や元気を与えるじゃないですか。

宮里：苦しい状態で杉山愛さんというプレーヤーを見て、お母さんとずっと一緒に、コーチであり、お母さんであり、移動して、どんなことをお考えのかなとしつこく考えたこともあるんですよ。偉大なプレーヤーだし。今日お会いできると聞いたときに、私なんかでいいのかなと思ったんですよ。お忙しいなか本当に嬉しかったです。

杉山：お母さまがずっとお話下さったことにブレはなくて、私も全く同じ考え方をもっていたので絶対に素晴らしいプレーヤーは素晴らしい人間性を持っているし、それを支えているご両親であったり、表には出てこないけれど、お母さん達のそういう底力がそのプレーヤーを支えているんだと思います。

宮里：いまはなにもしていませんし、野放し状態ですから。

杉山：いやいやいや。本当にそれを、ある意味私たちも引退してやりきった部分があるので、実はそういうゴルフでもテニスでもツールは何でもいいと思う

んですよ。そういうものが家族を通して、彼女たちに素晴らしいものを与えてくれる。だから簡単にいってしまえば、人に思いやりのない言葉を吐いたりするプレイヤーは上に行ってはいけないと思っているんです。それを形にしたいんですよ。トップの選手はそういう人間性を持っているんだと、なにか見つけたいのです。それはやっぱりそれだけスポーツが素晴らしいものだ、世の中に伝えていくのが、愛や私の役目だと思っているし、それを証明したいんです。

宮里：藍にメールを送るとすぐにいろんなメールを返してくれます。彼女はいろいろあったことを全部話してくれます。丸山さんの奥さんとか食事に誘われたとか、ショーン君も一緒にいて和やかな雰囲気だったというようなメールだったり。その時点であったことを報告してくれるので、彼氏ができていようが、なにをしようがオープンで、隠す必要がないんです。

なので、「あなたがゴルフを止めたい。結婚したい。って言ったら、それはあなたの人生だから藍に任せる。だから、どうして、こうしてとは言わないから。あなたの人生だから」ということも言っていますし、そういうことを一切オープンに話をしているので。気にしないでいいんですよ。

そういう親子の会話のなかで隠さずに、話せる部分がいい形でできていると思います。ある程度は親に言えない部分は、兄弟3人がいつでもメールでやりとりをしているので、「お父さん最近なんか変じゃない？」とか、私には言いませんが、兄弟間でやりとりしあっていたり。

でもいつも、彼女が帰ってきたら、すぐに電話をして「藍が返ってきたよ、ご飯を一緒に食べよう。」東京とかに来たときには、「あい」さんのコンサートをよく聴くんですよ。彼女も歌が好きで、で3人でコンサートに行ったりとか。兄弟でなかなかうまくいかない人もいますが、これだけは自慢で言えるのが、兄弟3人が本当に仲が良く、いい形でここまで来てくれたと思いますね。

杉山：本当にそれは自慢ですよ。

宮里：誰かがスランプに陥ると必ずメールが来るんですよ。「何やってんのへたくそ」って。藍なんか特にお兄ちゃんに言うんですよ。そしたらお兄ちゃんも藍に「予選に落ちたか。やっとなんと並んだな」とかね。そういうことで、紛らわしたり。それはそれで兄弟でいい形で繋がってるなと思います。

杉山：本当にそれは幸せですよ。今度は藍さんの試合を見に行かれるのはいつですか？

宮里：全米です。7月4日こっちを出発します。それが終わって、一週終おいて、エビアンマスターズがあるんです。エビアンは去年のディフェンディングチャンピオンなので。フランスは行ったことがないので、「お母さん来たらって」言ってくれています。そしたらそのまま全英です。あとはカナダ女子オープンとか。だいたい今年は7月までびっしりです。まあ、とにかくケガのないように。

いつも口を酸っぱくして言うのが「今日はどうでした？」ということです。うるさいと思われるかも知れないけど、喉からしか菌は入っていかないの。風邪にかかってしまったら最後、薬は飲めないし、ドーピングがあるから、まめにうがだけは忘れないでね。ってメールに最後にいれておきます。小うるさいと言わないでって。

杉山：今年は楽しみがいっぱいですね。

宮里：ケガのないように、その週のプレーを楽しんで、彼女がいい気持ちでプレーが追われればそれでいいかなと思います。あえて結果は求めないですね。テレビで見ている「あー、楽しそうにプレイしている」って。それを見たときにはホッとするんですよね。苦しい表情を見るのは嫌ですからね。ときおり苦しいけど、やっちゃったっていう感じくらいで。ピリピリしていると人間、表情にも表れるし。精神的にも苦しい。心も重くなる。すべてに影響してしまうので。

杉山：最高ですよ。好きなことを職業にできて、人に勇気や元気を与えられるって。

宮里：保育園くらいの子どもたちが応援に来たときには「藍ちゃんががんばって。明日も応援するから」って声をかけてくれると、「明日ねー」って声をかけるんです。本当に子どもが好きで。サインに並んでいるときも、子どもはかきわけてくるので、「すみません、小さい子から先をお願いします」。ずっとこんな状態でも待っていてくれるんだね。

杉山：なんか似てますね。うちの愛ちゃんと。似ているところがたくさんありますね。

宮里：それ以上はやっぱり、自分もプレーに対して楽しくないし、見ている人たちにも、ブラウン管を通じて、「自分も苦しかったけれど藍ちゃんにパワーもらったよって」藍を見ていたら、いろんなファンの人たちの気持ちが伝わってくるんですよ。厳しいところはコメントしてほしいですね。「彼女の表情がよくない」とか、思っていることをストレートに出してくれるお客さんがいて、親が言うよりもファンの方が言ってくる方が藍も感じる部分があるかも知れないと思うんです。

杉山：私は今日凄い勇気をもらいました。やっぱり人間力ですね。いつもそばにいらっしゃるご両親であったり、家族であったり。

宮里：うちはおばあちゃんがずっと元気でいてくれました。お年寄りの同居というのは大変かも知れないけれど、思いやりの気持ちを、どういう人に対してもつながるものもあるし、お年寄りだから特別にということではなくて、人間

誰しもが人に対して思いやりの心をもつことは大事なことだと思います。

杉山：私たちも実はそこを一番大事にしています。2004年に愛と私は洗礼を受けてクリスチャンになりました。外国人の神父様にひよんなことからお話を伺って、私たちも毎日をきちっと反省したり、省みる時間も少ないねって話をしていの中でお会いしたんです。「忙しいという字は心を亡くすと書くじゃないですか。それはすごく悲しい」という話になったんですね。心を亡くすと言うことは、人のことを思いやれなくて、自分勝手ということです。それって悲しいですよ。

バタバタしてるんですよとか、ちょっと今日は時間がなくてということはあるかもしれないけれど、忙しい。「忙しそうね」と言われると私は思いやりを亡くしているかしらと反省します。それを言われて、1日神と向き合うでもいいし、それは神じゃなくて誰でもいいし、1日、5分でも10分でも自分と向き合う時間を作るのは必要なんだと。そういうきっかけがあって、クリスチャンになりました。人を思いやれるというのは自分に余裕がないとできないだろうし、そこを大事にしてきましたね。

宮里：私たちは、粗雑に育った状態なので、どうやってこの子達をうまく、人に対して思いやりの心をいつも持っていて、おばあちゃんの20代の頃からずっと講義のクリスチャンだったんです。伝道して。だから、主人や姉なんか小さいころは日曜教会に連れて行ってもらって聖書を読んだり、今でも結婚式とかは教会であげたりしています。だからその時期その時期に、イースターやクリスマスなどおばあちゃんがお祈りをしてもらってました。年の暮れにもみんなテーブルついて、1年間のお祈りをおばあちゃんにしてもらってました。おばあちゃんに話をしてもらって、みんなで勇作はどうだった、藍はどうだった？って。話しかけてくれて。来年もいいことがありますようにって。締めくくりを年末にいつもやって、また来年頑張ろうねって。そういうことがずっと続いてきたので、92でなくなるまでずっと聖書を読んで。活動しながら、人と会話をするのが好きな人でしたから、子どもたちにも、そんなことをしたら神様も許してくれないよ。大変なことになるよ。お祈りしなくちゃって。

杉山：私たちも思いやりと、ここまできたのはみんなの力を借りて、感謝と言う言葉を忘れてはいけないねって。

宮里；感謝を忘れたらもうだめだよーって。いつもありがとって。その言葉を人の心に響くように。そのひと言がその人を救うこともあるし、いろんなところで繋がるから。

杉山：本当にそうですよね。まったくおっしゃるとおりで。私たちも、私の父が90歳で亡くなったときもずっと昏睡状態が続いたんです。父も英語を話した人で、昔風に言うとハイカラな人だったんですけども、愛もツアーから返っ

てきて、昏睡状態からハッと目が覚めて、「THANK YOU」って言って亡くなったんですよ。そのあとパタッと。それで、お墓も墓石を新しいものを作りました。

宮里：なんかうちと同じような感じですよ。隣に墓地があるんですけども、おばあちゃんはクリスチャンだったので、本人の長年の夢もあるから大きな石に「神は愛なり」と彫って、綺麗な石碑をお墓のそばに大きく建てました。おじいちゃんも一緒にお墓の中に入っているけれど、おばあちゃんの生きた証を残しておこうって。

杉山：やっぱり続いているものというのがあるわけですよ。

宮里：みんなお年寄りには年を取ったら大変だと言いますが、自分が年を取ったらどうなんだって。とにかく感謝の気持ちと、誰にでもいたわりの気持ちを忘れないようにしたいと思います。

杉山：私は本当にそれだけで今日は勇気をもらいました。本当に感謝と思いやりというのを軸に、テニスでもゴルフでも何でも世界1になろうがなんでも、そのツールがあるだけで、ベースはそこにあると思うんですよ。なので、そのへんでまとめたいと私は思っています。

宮里：私も話があっちにいたり、こっちにいたり。

杉山：なので、また、たぶん、これを機会にメールのやりとりも含めてよろしくお願いいたします。

宮里：是非また東村の方にも。田舎ですけど。彼女たちが、田舎道を学校に通って、本当に都会に行ったら、ゲームとかいろいろな遊びがいっぱいあるじゃないですか。田舎は田舎道を友だちと一緒に返ってきて、ちょっと寄り道して海に行って貝を拾ってきたら、おばあちゃんに喜んでもらえるとか。魚を捕ってきたとか、カニがいたとか、そんな状態の田舎です。

だから非行するとかそういうことがなかったです。他の子供たちも。遊ぶ場所も何もないので。みんながあのゲームが、あのテレビがという話をしていたときに、ふとなにないけどと...ちょっと寂しくなるときもあるけれど、いまはほとんど普及をしているので、いまは昔のような田舎道というのはないけれど、でも、自然はまだあるし、田舎のよさというのがあるので、そこでうまく育ってくれれば。

杉山：いいですね。目に浮かぶようです。本当にステキなお話をたくさん伺って勇気をもらいました。今日はなにか伺うと言うよりも、これをきっかけに是非。ママが行くからよろしくねって、藍さんにメールしとくわって。言ってた

んですけど。

宮里：ほんとに嬉しいです。こういう機会にお近づきになれて。

杉山：本当に私もいままでバタバタしていて、いろんな方とお話したいなーと
思っています。

宮里：緊張した状態でプレーしているのを見ると、言葉に出来ない、表現でき
ない大変だろうなってことしか言えない、でもよく頑張ってるって。こないだ
の有明の試合は印象に残りました。知り合いのブリヂストンの山本さんという
方がいて、彼がいろんな方に連絡を入れて、愛ちゃんの試合に行きたいだけ
どーってすぐに手配をしてくれて。タイミングよく試合を見ることができて、
もう感激でした。主人も上から見ていて、藍とマネージャーは正面の方に招待
していただいて、本当に表現できないくらい嬉しくて。テレビで見るのとはま
た違った、彼女のあの笑顔を見るのは。

杉山：まだまだ藍ちゃんもこれからまた違うこともあるでしょうからね。

宮里：種目は違ってもやっぱり基になるのはひとつですからね。

杉山：きょうはそれを伺えただけでも価値がありますし、お近づきに慣れただ
けでも光栄です。

錦織清志（父）、錦織恵理（母）インタビュー記録

杉山：今日は改めて圭の小さい時のことなどをお聞かせいただきたいと思っています。

私が初めて圭に会った時は11歳でしたが、もうその時すでに『今までの小学生とは全く違う子』と言う印象でした。まだ身体も小さくてにこにこしているけどちょっとシャイな感じで、テニスコートに入ってプレーをする選手である圭とは全く別人でした。そこが愛ととても似ているというのがとても印象深かったです。

錦織清志（以下清志）：はい、その時にお話させてもらった中で、我々がずっと心掛けできたことは杉山さんが『大きい器の中で育ててあげてくださいね。小さい器を用意して、いっぱいになったら大きい器を用意するのではなく、最初から大きい器を用意してあげてくださいね』と言うことです。

杉山：そうですね、ありがたいことですね、覚えていてくださってずっとそのことだけをやってきてくださったなんて。

清志：ですから、圭が肘を壊してどうしたらいいか困った時、家族みんなが杉山ママにまずは相談しよう、ということになったんです。

杉山：そうでしたか。その時は無我夢中で『なんで私に？』と思いながらも私にできることならなんでもしてあげたいと思って、凄い重責なのに、引き受けてしまいました。結果、成功して良かったです。

さて、今日の本題です。圭がテニスを始めたのは何歳ですか。

清志：ラケットを振っていたのは3歳ですが、テニスらしくやり出したのは5歳です。

杉山：最初から上手かったのですか？ラケットには当たった？

清志：その前に、おもちゃのバットでボールを打っていたのですが、それも当たっていたので、それより当たる面積が大きいラケットは簡単に当たっていました。でも、先に始めていたお姉さんの方が上手いにきまっているけど、だんだん圭が上手くなって、このままいったら、冗談ですが、世界一になるなんて思っていました。

杉山：へえ～、世界一に？

清志：いや、冗談です。でも、大好きでなかなか止めようとしませんでした。いつまでもテニスで遊んでいました。で、僕が大学からやっていたのですが、そこからプロになるのは無理だけど、今からこんなに上手いんだったら、世界一になれるのかもな～、と、一人で妄想していました。勿論、圭にそれを言ったことは一度もありませんが。この頃、

圭に才能があるとは思わなかった。でも、思いは成就するとも思っていました。

杉山：そして、いよいよ本気に圭が世界へ、そして世界一になると思いだしのはいつごろですか。

清志：ん～、よく覚えていないですね。でも、その頃、バレーボールみたいなことや、遊びが入っていることをいろいろやっていて、それが、圭にとっても、お姉ちゃんにとっても、僕にとっても一番たのしかった。そういう遊びの中で

育っていったし、今はそれがいきていると思います。ですから、高校中学から始めたら遅い と思います。

そして、圭はいつも面白そうにやっていたし、真面目にやっていたことはなかったけど、やってほしいとも思っていなかったです。面白ければそれでいいと思います。テニスは「家族のきずな」みたいなものでした。当時を思うと、その頃が本当に子どもにとっても親にとっても凄くたのしかった。

杉山：でも、今でも違った意味で楽しいですよ？

清志：それはね。

杉山：そんな圭がテニスに夢中になっていったのだと思いますが、試合はいつからでたのですか？

清志：7歳ですが、そこそこ勝って、身体も小さかったので負けるんですが、それが悔しくて、親もですが、圭も泣いていました。このまま生半可にやっていたは勝てないし、苦しいだけなので、負けず嫌いな性格がだんだんテニスに集中していったのでしょう。

杉山：では、だんだん頭角を現してきて、プロを意識したのはいつごろですか？

清志：小学校 2 年生ですね。試合に出ていくと中国大会では負けなしでしたので、いよいよ才能があるのかな、と思いだした。その頃、全小で優勝することを 6 年生に設定したんです。

杉山：そうですか。凄いですね。その当時は他のスポーツはやっていましたか。

清志：サッカーはやってました。

杉山：いつまでやっていたのですか。

清志：4 年生までやってました。

杉山：そして、その後、サッカーを辞めてプロになると思われたわけですね。

清志：いや、プロになるというより、世界で戦うんだ、と思っていました。

杉山：世界＝プロ ではなかったのですね。

清志：漠然とそう思っただけです。杉山さんに大きい器って言われていましたから・・

杉山：確かに、そこでもその言語がそうさせたんですか。

清志：そうですね、それが良かったですよ。

杉山：光栄です。それから、勝ち続けたのですか？

清志：いや、負ける時も結構ありましたが、大きくなる時期が違うので、大丈夫かな、と思っていました。当時のコーチのことも信頼していたので、そしてそのコーチが才能を認めてくれていたので勇気づけられました。それに、「絶対にテニス」と思っていなかったのが、サッカーもずっとやっていて、サッカーにも友達がいたのですが、親が強制したのではなく、自分でテニスを選んでいきました。

杉山：いずれにしても、身体を動かうことが好きだったのですね。

清志：それは大好きで、テニスでもサッカーでもいつも外で、友達と遊び気分でやっていました、親もこうやって楽しそうにしている子どもをみることもとても楽しかったですね。ですから、練習に行こうと親が言ったことはありません。サッカーをやっている、目の前に大会があると集中して練習していました。兎も角、負けず嫌いで、勝敗に拘る性格で、勝つまでやりました。

杉山：愛もそうでした、それはテニスに限ったことでは無かったですが、圭はどうでしたか。

清志：圭も全く同じで、トランプでもどんなゲームでもそうでした。

杉山：全く同じですね。愛は真っ赤な顔してプルプルして我慢していましたが、圭はどんな封でしたか。

清志：圭は我慢ならずにちゃぶ台をひっくり返していました。(笑) 勝つまでやりましたし、勝って始めて圭は嬉しいんですね。それは、テニスの試合でもいつもそうです、今もそれは変わりませんね。

杉山：だから選手をやっているんですね。ところで、先ほど、テニスでなくてもいいとおっしゃっていましたが、テニスは錦織家にとってどんな位置づけになりますか。

清志：「家族の絆」ですね。みんなで遊び気分でやるテニスは最高でした。

杉山：うちもそうでした。では今ではテニスをやっていて良かったと思っ
ていますか。

清志：それはそう思います。今はママの役割と僕の役割が違うわけですが、どちらも子どもと
いいコミュニケーションがとれるのもテニスのおかげだと思っています。楽しみも苦しみもテニス
が運んでくれます。

杉山：ほんとですね。私も愛のディレクターとして、コーチとして一緒に仕事
しましたが、パパも圭のチームの一員として仕事していますが、どんな感じですか？

清志：だいたいことはエイジェントに任せていますが、「この人が圭にとって
適切な人か、つまり、コーチはこの人がいいとか、トレーナーはこの人がいい
というのは、多分、自分たちが一番わかっているので、意見を言わせてもらう
スタンスをとっています。だから、杉山ママにお願いできたと思いますし、
それは本当に良かったです。

杉山：ありがとうございます。当時、私が愛のコーチを辞めてすぐにパパ達から
連絡をもらって、圭と仕事することになった日に、私は圭から『コーチ、長い
ことご苦労様でした』と花のアレンジをもらってとても感激したのですが、
そういう圭の優しさはどこからくると思われませんか。

恵理：圭は自分のことを理解してくれる人や、自分に大事な人のことはとても
大切に思う子で、杉山ママには絶大な信頼をよせていました。私たちも杉山マ
マに復帰を手伝ってほしいと持っていました。圭もそう思ったみたいで同じ
で良かったです。もし、圭が嫌だと思ったり、また私たちもそう思わなかつ
たら、無かった話ですから。

杉山：光栄すぎますね。そして、圭と仕事を始めてトレーニングのこともかな
り煩く言いましたし、厳しいところと甘くするところをバランスよくしたつも
りですが、接すれば接するほど、『なんていい子』と思う場面が沢山あるの
ですが、その素晴らしさはやはり、パパとママからくるものなのでしょうね。

恵理：やはり、ちょっと変わっていますが、自分と馬が合うことは感がいい
です。だから杉山ママとは本当に、私たちの話さないことまで話してしま
ったから、馬が合うのだと思いました。そして、とても信頼してしま
いました。圭の小学校時代のコーチに対しても信頼してしま
いましたが、今回怪我をして復帰して、チ

チャレンジでも優勝は厳しい時代に、杉山ママが『絶対に圭は近いうちに優勝してきますから、その時までじっくり待ちましょう』と言ったのを覚えていますか。親の私でさえ、いつ優勝できるのかしら、とっていましたから、圭を心から信頼してくれる杉山ママのことは自分の感でよんだのだと思いますよ。

杉山：そうですか、ありがたいです。でも、その心はいつでも信頼できる人が

パパとママを含めて、お姉ちゃんも、コーチ、友達もいつも周りにいて、安心を圭に与えたからそういう心が育ったのでしょうかね。

恵理：そうかもしれませんね。

杉山：そうやって、知らずしらず圭をひっぱっていったことが、今の圭を作っているのですね。兎も角、本当にやさしい子で、そして、コートの上の圭とコートを離れた圭のギャップがたまりません。

恵理：でも、それは愛ちゃんも同じですね。

杉山：そうかもしれないです。素敵な選手はそのめりはりと言うか、それは大事なことなのですね。

今日は楽しいお話を沢山ありがとうございました。これから圭にも沢山のことがありますが、ずっとおっかけしたいと思います。

石川由紀子（母）インタビュー記録

杉山：今日はタイガー・ウッズとのイベントと言うことで見ながらお話をさせていただきます。普段は試合をよく見にいかれますか？

由紀子：遼の下に妹と弟がいますので、近場か夏休みなど長い休みの時にしか見に来れないですね。

杉山：では、今日はイベントだし楽しく観れそうですね。申し訳ないですが、遼君の小さい時のことを聞かせてください。遼君は何歳からゴルフを始めましたか？

由紀子：クラブは本当に小さい時から握っていました。お父さんがゴルフが好きで、大人のクラブを切って子供用を作り、庭で遊んでいました。

杉山：それは平日もそうでしたか？

由紀子：いいえ、お父さんは仕事が忙しかったので、週末だけです。

杉山：じゃ、平日はママと遊んでいたのですね。

由紀子：そうです。よく外へ遊びにでましたが、私も若かったなのでその分しっかりしないと！とと思っていましたので、遼には少し厳しかったかもしれません。公園でも人に迷惑をかけないようにとか、友達と仲良くとか・・・

杉山：でも、そういう事はゴルフ云々の前に大切なことだし、それが、今の遼くんを作っているのではないですか？

由紀子：そうだと思います、お父さんはそういうことにとっても厳しかったですし、今も厳しいです。

杉山：大事ですよ。私も愛が小さい時には、人を思いやることであるとか、人に迷惑をかけないとかを沢山話してきました。

由紀子：愛さんもそうですか。

杉山：はい。どんな遊びをやっていましたか。

由紀子：公園の遊具を使ってとか、友達同士で楽しそうに遊んでいました。

杉山：時間的にも長い時間を外で過ごしたんですか。

由紀子：ええ、晴れの日、昼食以外は夕方近まで外で遊んでいました。

杉山：なるほど、では、お父さんとは週末にゴルフをしていたのですね。

由紀子：そうです。自分がただただゴルフが好きで、下の子どももまだ生まれていませんでしたから、週末は遼にかかりっきりで、二人でゴルフしたり、いろいろ遊んでいました。

杉山：ゴルフを始めたのはとても早かったと思うのですが、その頃は他のお稽古や習い事などをやっていましたか。

由紀子：ええ、やってました。スイミングやサッカーもやっていました。小さい時から体を動かすのは大好きで、今でも、自分のフットサルチームを持っていたり、少し時間があるとテニスをやっています。

杉山：へえ、そうなんですか。ご主人様がゴルフ好きで始められたということですが、最初めはプロにするとかのお考えはなかったのですか。

由紀子：いえ、とても・・・主人がゴルフがただただ好きでしたから始めましたし、でも、その一緒にやるゴルフの時間は親子のいい時間になりました。ゴ

ルフをやっている、途中で辞めてはいけないとか、きちんと話す、話し合う習慣がついたと思います。

杉山：それから、遼君がゴルフにのめり込み、ゴルフに特化していくまでにはどれくらいの時間がかかりましたか。

由紀子：そうですね、11歳ころに小さい試合に出て、優勝してから、遼も主人もゴルフに集中していきました。その頃は下に妹も弟もできましたので私はそちらの方が忙しくなり、遼は主人と二人でゴルフの練習に励んでいました。練習もほとんど毎日やってました。

杉山：毎日？病気したりはしなかったのですか

由紀子：そうですね、でも、毎日の練習時間は主人が帰ってきてからなので2時間くらいですからそんなに負担は無かったようです。

杉山：では、試合なども早くに出したりしていたのですか。

由紀子：ん～、10歳の時ですね。その時はどんな成績かよく覚えていませんが、本人は優勝できなくてとても悔しがっていました。そして、翌年には優勝できてとても喜んでいました。

杉山：では、その頃にもうゴルフに専念するという感じでしたか。

由紀子：はい、親子でそう思い始めたと思います。

それからは、主人も忙しい仕事を少しづつ減らす感じでだんだんゴルフをやる時間が増えていきました。ほとんど毎日やっていましたし、毎日2～3時間はやっていました。それから1年ほどして、他のスポーツを止めました。遼が止めたいと言ったというか、ゴルフの時間が増えて、できなくなりましたね。

杉山：なるほど、最初にスイミングやサッカーをやり始めたのはお両親の意思ですか。

由紀子：そうです。遼があまり、身体が丈夫でなかったのも、何か身体を動かすことをさせたかったのです。でも、幸い遼も身体を動かすことが大好きで続けていくことができましたね。

杉山：ゴルフを専門にやるようになって、遼君に才能があると感じることはありましたか？

由紀子：いえ、周りには沢山遼より上手なお子さんも沢山いました。でも、主人はどのように思っていたかはわかりません。

杉山：ゴルフに専念してから、ご主人様は口煩く言ったりはしましたか。

由紀子：多少は煩い感じでしたが、遼が嫌がっている様子はなかったです。私は主人と遼が楽しそうにやっているのを観て、とてもいいな、と思いました。

杉山：遼君は負けず嫌いでしたか。

由紀子：いえ、どちらでもないと思います。小さい時は特に、友達や私たちとも争うことはしなかったですね。どちらかという、一歩引いている感じがしました。

杉山：へえ～、そうなんですか。では、集中力なんかはどうでしたか。

由紀子：それも普通でした。車のプラモデルなんかを作っていて、最後まで作ることができなかったんです。

杉山：リーダーシップはどうでしたか？

由紀子：それはあったと思います。小学校5年生頃には、クラスの中心にいた

ように思います。運動会や音楽会などではみんなを引っ張っていたように思います。

杉山：そうですか、今のきちんと堂々としたお話の仕方はそういうところにあるんでしょうか。

由紀子：それもあるかもしれませんが、主人がいつもきちんと話し合うことをしてきました。遼が何かをしたいと言ってきた時に、『何故、それがしたいのか』とか、『何故、それがほしいのか』など・・・

杉山：遼君はそれが出来る子だったんですね。うちの愛も対話のできる子でした。いろいろなことをよく話しあってきました。遼君もご主人とよく話されてきたんですね。

由紀子：はい、主人は根本的なところをよく話していたと思います。

杉山：それはとても大事なことですよね。昔、お芋を植えたばかりの畑に友達が入って、そのお母さんが『こらっ、そこに入ったらおじさんに怒られるよ!』と、私はその時、『そうじゃないのよ、春になって芽が出てこなくなるから、畑に入ってはいけないんだよ』よ、説明したことがあります。

由紀子：そうそう、そうなんです。うちの主人もいつもそうでした。きちんと物事の根本を話せば解る、と言っていました。

杉山：コミュニケーションが大事ですね。ところで、遼君がプロとしてやっていく、と決断されたとき、あ、遼君が自分で決断したと聞いてますが、それでいいですか。

由紀子：はい、遼が自分で決めました。その時、主人もいろいろ調べたりしていましたが、結論としては、もし、選手としてトップにいかなくても、ゴルフ関係の仕事で食べていけるだろうと判断し、賛成しました。

杉山：親としてはいろいろなリスクを考えたり、でも、こうならできるとか・・・でも、結局、子どもが決めたことに、今までと同じように、先を調べ、いざと言うときには、なんとかなる方法を持っているものですよ。とても似ています。もしかしたら、遼君も愛に似ているのかもしれませんが、私たちの考え方も石川家に似ているような気がします。

素晴らしいインタビューの受け答えにいつも感心しているのですが、それは自分で考える力があり、きっと、心から信頼できるご両親が側にいてくれる安心感から、そしてコミュニケーション力があるので、記者の人たちからのとんでもない質問にもあのようにきちんと答えられるんですね。

由紀子：愛さんもそうですよね、いつも感心してテレビを見させてもらってます。

杉山：いや、ありがとうございます。小さい時から、きちんとキャッチボールができていたことは大事だと言うことがよく解りました。本当に今日は楽しかったです。ありがとうございました。